
魔法仮面リリカルオーズViVid

ハナト・バーニングブレイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法仮面リリカルオーズVivid

【Nコード】

N4438X

【作者名】

ハナト・バーニングブレイブ

【あらすじ】

『J・S・事件』から4年後、『マリアージュ事件』から1年後……。
仮面ライダーオーズとしてちよいちよい戦い続ける青年、『高町エイジ』の戦いは、新しい舞台へと移る！
突如現れるファンガイア！対抗するのはもちろん……！？
運命の鎖が、今解き放たれる！

魔法仮面リリカルオーズVivid！

はじまります！

プロローグ（前書き）

始めましての方、そうでもない方、どちらにしてもどうも、ハナト・ブレイブです。

この度は、魔法仮面リリカルオーズ Vivid をお読み頂き、誠にありがとうございます。

この回はプロローグで短いですが、次回より本格的に指導させていただきます次第でございます。

では、プロローグをどうぞ！

プロローグ

マリアー・ジュ事件から、1年後。

元機動六課の戦技の切り札こと『高町なのは』はその翼を休め、
新たなる世代の為新生活を送っていた。

当然の事ながらその夫、『高町エイジ』、もとい『エイジⅡHⅡ
タカマチ』もそれに付き添い、その傍ら独学の流派、『王達の流派』
を追求している。

そんなこんなで二人の娘である『高町ヴィヴィオ』は、居候者の
『アンクⅡヒノ』を対戦相手として『ストライクアーツ』を学んで
いる。

これから始まるのは、そんな高町家の面々を軸とした、新しい戦
慄の物語……。

魔法仮面リリカルオーズ Vivid
はじまります……

プロローグ（後書き）

次回、【戦慄と格闘技と新たな戦い】
お楽しみに！

第1話 戦慄と格闘技と新たな戦い（前書き）

お待たせ致しました、ようやく本編です。

新キャラが一気に登場するので混乱してしまうかも知れませんが、
少しずつキャラを掘り下げていきますので今しばらくお待ち下さい。

では、本編どうぞ。

第1話 戦慄と格闘技と新たな戦い

——1週間前

ミッドチルダの上空を、背中に城を背負った龍が飛んでいた。その中で、3人の男性が暗い部屋で話をしていた。

「ねえねえ、真紅はどこ？」

セーラー服を着た少年が、スーツ姿の男性2人に話しかける。

「大方、またドランの口だろう……」

「じつ、つあん、でぶ……」

強面の男性がコーヒーを飲みながらそう答え、大柄の男性が若干間違った日本語を発する。

「一方話しに出てきた”真紅”はというと……」

「……やっぱり、良い眺めだね」

『だなぁ！』

茶髪の少年が、龍の舌に乗って外を眺めている。その横を、小さなコウモリが飛びながら答える。

すると急に足場が揺れ、真紅も慌てて踏ん張る。

「キャ、キャッスルドラン!? キバット!」

『おいおい、どうした!?!』

真紅とキバットがオロオロしていると、ついに龍『キャッスルドラン』が恐れていた行動を起こす。

『ギシャツクシエイ!?!』

盛大なくしゃみをし、真紅とキバットは唾液まみれになりながら地上に吹き飛ばされる。

「『うそおおおおおおおおおおおおお!?!』」

その言葉も空しく、真紅とキバットは地面に突き刺さった。それに気付かないまま、キャッスルドランは時空を超えてどこかに行ってしまった。

地面に突き刺さった真紅とキバットは、1週間経つまで放置される事になる……。

○魔法仮面リリカルオーズVivid
第1話 戦慄と格闘技と新たな戦い

——ハラオウン家

その玄関で、1人の少年が慌てて靴紐を結んでいた。

「フェイトさん、行ってきます!」

その声に、奥から金髪の女性『フェイト』テストロツサ『T』ハラオウン』がキツチンから顔を除かせる。

「ユースケ、気をつけてね！ 変なものに近付いちゃダメだよ！？」

あまりにも過保護なその言葉に、少年『ユースケ』A『ハラオウ
アレクシード
ン』は苦笑いを浮かべる。

「いや、俺だってもう10歳ですから……」

「そっか……ユースケのママになってからもう3年経つんだね……」

そこからユースケの昔話をし始めるフェイトに、ユースケは頬を赤らめる。そして慌てて視線を逸らすと、早く学校行けと言わんばかりに鎮座する時計が目に入った。

「おわっ！？ そ、それじゃあ行ってきます！」

「うん、行ってらっしゃい」

フェイトに見送られ、ユースケはバタバタと駆け出した。

白い制服に茶色いカバンを提げたユースケは、空の日差しを眩しそつに右手で防いだ後、青空に向かって真っ白い歯を見せて走り出す。

その軽快な足取りから、気分の高さが分かる。

何と言ってもこの日は新学期。ユースケは初等科4年生に進級し、

新たなクラスで生活するのを楽しみにしていた。仲の良い友達と離れてしまうのは悲しいが、まだ知らない人と友達になれると考えると、彼の足取りはさらに軽快になった。

その道中で、金髪の少女と紺髪の少女、そしてクリーム色の髪の少女と会う。

「ヴィヴィオ！ リオ、コロナ！」

手を振りながら少女達の名前を呼ぶと、少女達は困った様な表情で振り向く。

「あ、ユースケ！」

金髪の少女、『高町ヴィヴィオ』がまず最初にユースケの名前を呼ぶ。それに続く様に『リオ』『ウェズリー』と『コロナ』『ティミル』が話す。

「なあ、これどう思う？」

「何か刺さってるんだけど……」

そう言われてひょっこり顔を除かせると、体型からして少年のものと思われる体が地面から生えていた。いや、正式には地面に突き

刺さったのだが……。

ユースケはそれを突いたり引っ張ったりするが、全く反応を示さない。

「なんだろうな……」

4人の少年少女は、揃って首を傾げた……。

——高町家

ベランダで洗濯物を干すプー太郎青年、『高町エイジ』。その横で、赤い右腕『アंक』が洗濯物を干すのを手伝っている。

なのははリビングで何か作業をしているが、突然エイジの動きが止まる。そしてアंकと目を合わせ、エイジはエプロンを放り投げて走り出す。

「ごめんなのは、俺行ってくる！」

「えっ！？　ちょ、どこにい！？」

なのはの言葉を見殺し、アंकとエイジはメダルを引っ掛けて走

り出す。勢い良く閉じられた扉を見ながら、なのはは可愛らしく怒った様に頬を膨らませた。

——クラナガン

走り続けるエイジとアंकの前に、ガゼルを模したグリードが現れる。その横には、ウマを模したステンドガラスの様な模様をした怪人、『ホースファンガイア』が立っている。

「あれって、最近人を襲ってるっていう……。えっと……？」

「ファンガイア、だな」

エイジの言葉に、アंकが補足する。「ま、なんでもいつか」と
呟き、エイジはオーズドライバーを腰に巻きつけ、アंकからオレ
ンジのメダル1枚と、赤いメダル2枚を受け取る。

そのメダルをドライバーにセットし、オースキャナーを振り上げてスキャンする。

「変身っ！」

【ライオン・クジャク・コンドル！】

頭金色のライオンを模した『ライオンヘッド』、胴体は赤いクジャクを模した『クジャクアーム』、脚はコンドルを模した『コンドルレッグ』を纏った戦士、『仮面ライダーオーズ・ラジャドル』へと変身した。

オーズは変身直後、牽制の意味もかねてライオンヘッドから強烈な光、『ライオネルフラッシャー』を放つ。

ヤミーとファンガイアが怯んだ隙に、オーズは左腕に装着された赤い盾、『タジャスピナー』から火球を放ちながら殴りかかる。

ホースファンガイアは負けじと剣を取り出し、オーズの火球を切り落とす。

オーズは剣をタジャスピナーで防ぎ、背後から掴みかかってくるヤミーに回し蹴りを放つ。その際に足先から真空はが放たれ、ヤミーは自身の肉体を構築している銀色のメダル、『セルメダル』を数枚零しながら吹き飛ばす。

『くっ……そっ！』

焦りを感じたホースファンガイアが剣を2本に増やし、両方を駆使してオーズに斬りかかる。1本はタジャスピナーで防げて、もう1本の斬劇を食らい胸の円、『オーラングサークル』から火花が散る。

「うあっつ……っ！」

胸を抑えて少し下がると、今度は背後からガゼルヤミーが鋭い角で突進してくる。油断していた所に背中を強打され、オーズは前のめりに倒れ込む。

その背中をガゼルヤミーが何度も踏み付ける。そして後頭部を掴まれ、乱暴に手近にあったビルに放り投げられる。オーズは瓦礫の中に埋もれ、出てくる気配は無かった。

「エイジ！」

アंकがすぐさま瓦礫をどかしに行くが、ホースファンガイアがそれを阻む。

するとホースファンガイアの剣を何かが弾き飛ばし、弾いた何かはアंकの後方へ戻っていく。

「あん？」

アंकがそちらを見ると、茶髪のおとなしそうな少年と、剣を弾いた小さなコウモリがゆっくり歩いてくる。

「キバット！」

『イエーイ！ 祭りだ祭りだあー！！』

少年、真紅が叫ぶと、キバットが元気良く答える。キバットは真紅の右手に収まり、口を広げて真紅の左手を噛む。

『ガブッ！』

すると真紅の顔にステンドガラスの様な模様が現れ、腰に鎖が巻きついたかと思うと赤いベルトに変わる。真紅はキバットを前に突き出し、エイジと同じ様に叫ぶ。

「変身！」

キバットをベルトの止まり木に固定し、しっかりと装着する。すると真紅の体が一瞬膨らみ、それを破る様にして赤いコウモリのような戦士が姿を現す。

『キ、キバ……！』

「キバ……？」

ホースファンガイアが怯えた様に呟き、アंकがその単語を復唱する。

赤い戦士、『仮面ライダーキバ』は腕を少し下ろし、真っ直ぐファンガイアに向かって走ってくる。

「ハッ！」

キバの拳がホースファンガイアの長い口元を捕らえ、ゴキツと嫌な音を立てて吹き飛ばす。

『あがが……』

どうやら顎が外れた様だ。そんな事は気にせず、キバはホースファンガイアに向かっていく。

一方ガゼルヤミーは、オーズに止めを刺そうと瓦礫の中に近付いていく。アंकが瓦礫とヤミーの間に入るが、さすがに右腕1本では大した力が出ず、あっさりと飛ばされてしまう。

すると紫のメダルが3枚飛来し、ガゼルヤミーを弾き飛ばして瓦礫の中に入っていく。

【プテラ・トリケラ・ティラノ！ プットオティラーノザウルス！】

音声と共に瓦礫が吹き飛び、上から紫のプテラノドン、トリケラトプス、ティラノサウルスを模した戦士、『仮面ライダーオーズ・プティラコンボ』が現れる。

オーズは地面に腕を突っ込み、そこからメダルの力で錬成した斧、『メダガブリュー』を取り出す。

「おおおおおおおおおおおおおおおおお
！！」

オーズは力強い咆哮を上げ、自身の足元から徐々に周囲を凍てつかせる。ガゼルヤミーの足元も凍りつき、その隙にオーズはセルメダルを1枚メダガブリューに食わせる。

【ゴックン！】

メダガブリューをバズーカモードにし、その引き金を引く。

【プットオテイラーノヒツサーツ！】

「セイヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

紫電の極太光線がガゼルヤミーの体に命中し、爆発を起こしてセルメダルの山へ変わる。オーズはメダガブリューを握っていた腕を下ろし、アंकはセルメダルをかき集める。

その間にもキバはファンガイアの剣をへし折り、蹴り飛ばして止めるに入る。

赤いホイッスルの様な物をキバットの歯に挟み、それを前に倒す。

『ウェイク、アープ!』

キバットの声と共に周囲が暗くなり、キバは上体を曲げて腕をX字に組む。そして顔を上げ、右脚を大きく振り上げる。その脚に付いた鎖をキバットが弾き飛ばし、脚に赤い羽根が広がる。

キバは左脚をバネにして飛び上がり、空中で回転して勢い良くキックを叩き込む。

「くあっ!」

そのキックがファンガイアをビルの壁に叩きつけ、壁にコウモリのようなキバのシンボルが描かれる。ファンガイアはガラスの様に碎け散り、周囲に散らばる。

暗かった周囲も元に戻り、キバはオーズと向き合う。

「君は……?」

オーズが首を傾げて聞くと、キバは肩で荒い呼吸をするだけで何も言わない。

「はぁ……はぁ……」

そしてキバットがベルトから離れ、キバは真紅の姿に戻る。が、そのまま真紅は意識を失って倒れてしまった。

「ちよっ！」

オーズも慌てて変身を解除し、真紅を抱える。額に脂汗を滲ませ、苦しそうに喘ぐ真紅。エイジはそのポケットから少しはみ出たハンカチに書いてある名前を見て、再び真紅を見る。

「くれない紅……しんく真紅……」

真紅の名前を呟き、エイジは思い出したかのように真紅を背負って家に向かった。キバットも心配そうにそれに付いていく。

アंकはセルメダルを集め、肉体を構築していたとか……。

これが、仮面ライダーオーズこと高町エイジと、仮面ライダーキバこと紅真紅とキバットとの出会いだった。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ×1

ティラノ×1

第1話 戦慄と格闘技と新たな戦い（後書き）

一応補足しておきますと、パンダとカンガルーは雑誌の付録メダル、ガゼルはオースキャナーの音声に登録されているものです。キバットは果たして何世……？

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

エイジ

「俺はエイジ。高町エイジ」

真紅

「く、紅……真、紅……」

ヴィヴィオ

「アンクー」

アंक

「おぼろっそ！」

エイジ・真紅

「変身っ……」

次回、【覚醒♪受け継がれるソロパート】
お楽しみに！

第2話 覚醒_♪受け継がれるソロパート（前書き）

後悔しないため、手を伸ばそうとする意思が、翼となって戦士に新たな力を与えた。

元ネタ、分かる人はいますかね？

第2話 覚醒[♪]受け継がれるソロパート

魔法仮面リリカルオーズ Vivid！ 前回の三つの出来事！

一つ！ 『J・S・事件』から4年、『マリアージュ事件』から1年後。突如街中にファンガイアが出現する！ その一週間前、巨大な城を背負った龍のくしゃみにより一人の少年がミッドチルダに落下する！

二つ！ 『フェイトⅡⅡⅡハラオウン』が2年前に引き取った少年、『ユースケⅡAⅡハラオウン』とその友人、『高町ヴィヴィオ』、『リオⅡウエズリー』と『コロナⅡティミル』は、地面に突き刺さった少年を発見する！

そして三つ！ 『高町なのは』と結婚した『高町エイジ』は突然街中に飛び出し、『アンクⅡヒノ』と共にヤミー、ファンガイアと戦闘を開始！ その最中、仮面ライダーキバも合流！ 変身を解除した少年、『紅真紅』を背負い、家へと戻っていった……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アンク）

クジャク×1

コンドル×1
ライオン×1
シャチ×1
サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

——高町家

2回の客室のベッドで、真紅は深い眠りについていた。着いて来た『キバットバット？世』の話によると、一週間も地面に突き刺さったまま放置され続けたらしい。

横で付き添うなのはとヴィヴィオは驚愕し、目を見開く。そしてヴィヴィオはふと部屋を見渡した。

「パパは？」

「庭。また魔法の練習してるんじゃない？」

ヴィヴィオの言葉になのはが答え、ヴィヴィオはベランダから庭を見下ろした。なのはは引き続き真紅の気持ち良さそうな寝顔を見る。

どこかエイジと似た様な雰囲気を感じていたから……。

——高町家・庭

目を瞑って精神を集中するエイジの横で、アंकが浮遊している。エイジはすつと右手を前に出し、そこに紫の三角形型、『古代ベールカ式』の魔法陣が展開される。そこに周囲の魔力がまるで流星群の様に群がる。

「う……くっ……！」

途中でエイジの表情が歪む。それと同時に魔力は拡散し、エイジは大きく息を吐く。

自分の両手を見つめるエイジに、アंकが声をかける。

「お前、まだ不調なのか？」

「まあね。強引に体の中に入ったものが、強引に引つ張り出された。楽して戦える仮面ライダーなんて、早々無いって事」

半ば開き直ったかのような発言に、アंकはただただ黙っている。気合を入れる意味も込めて両頬を叩き、エイジはアंकに言う。

「アंक、この事は……なのはには内緒にしておいて」

「誰に内緒なのかな？」

エイジがそう言うと、すぐそこになのはが迫ってきていた。忙しなく視線を泳がせるエイジに、なのはは大分怒った様子で言い聞かせる。

「エイジ、結婚したんだからもつと私達に心開いてよ……。内緒事とかしないで。私達はそれを全部受け入れるから。ね？」

「……なのはも、俺達に言っていない事あるよね？」

なのはは子供に言い聞かせるかのようにエイジに言う。可愛らしく小首を傾げるなのはに、エイジが思わぬカウンターを放つ。それに今度はなのはが視線を泳がせる。

「魔力落ちたんでしょ？ 8パーセントも」

「……バレてた？」

エイジが心配そうに言うと、なのはは悪戯の失敗した子供の様に少し舌を見せる。

エイジとアंकは軽いため息をつき、説明の為家の中に戻っていた。

「とても23歳の仕草じゃないよね……」

「ふんっ！」

「うっ……」

○魔法仮面リリカルオーズVivid

第2話 覚醒、受け継がれるソロパート

——次の日

side：真紅

「……は……？」

目を覚ました僕は、開口一番そう呟いた。眩しい光に一瞬目が痛くなり、ぎゅつと瞑る。すると瞼の裏に昨日の出来事がフラッシュバックしてきた。

ファンガイアの気配を察知して地面から頭を抜き、現場に急いだ。そこでは別の戦士と赤い腕が、ファンガイアとガゼルみたいな怪人相手に戦っていた。

僕もキバになり、ファンガイアを倒した。その後だ。急に意識が遠くなり、次の瞬間にはここにいた……。

横でキバットが寝ているのを確認すると、ドアがノックされる。その奥から、金髪を可愛らしく小さく結んでいる少女が入ってきた。あの服……学校の制服かな？

「あつ！ 良かった、気がついたんですね！？」

「えっ？ えっと……はい、おかげ様で……」

突然僕の手をとって顔を近づけてくるその子に、思わずドキッとしてしまう。

うう、これだからガルルに軟弱者って言われるんだよ……。

「あ、私高町ヴィヴィオって言います！ あなたのお名前は？」

「え、えっと……。く、紅、真紅……です……」

ついいつもの悪い癖で、初対面の人に怯えて自己紹介してしまう。はあ……もっと男らしくになりたい……。

side：真紅 off

side：ヴィヴィオ

「え、えつと……。く、紅、真紅……です……」

「あ、はい。よろしくお願いします……」

様子を見に来たら、この人が目を覚ましてて良かったと思った
のもつかの間！

何だか怯えてるみたい……。わ、私何か怖がらせる様な事しちゃ
ったかな！？

あ、でも最近ママに似てきたって言われるし……。
もしかして、それ？

緊張しちゃってるのか顔を少し赤らめながら視線を泳がせるその
子に、思わず小動物的な可愛さを感じてしまう。うう、可愛い……。
はっ！ 初対面の男の子にそんな事思うなんて失礼だよね……。

「あ、あの……」

「は、はいっ!？」

「学校……行かなくていいんですか？」

「えっ……？ ああ！」

可愛らしい少年が時計を指差しながら私に言ってくる。釣られて時計を見ると、既に長い方の針が10、短い方の針が7と8の間に来ていた。あ、ちなみにママに頼んで地球型の時計を設置してます！と、そんな事より急がなきゃ！

「そ、それじゃあ私は学校行ってきますね！ 何時間かしたらすぐ戻ってきますから！」

私は急いでその部屋を後にした。
直後に彼も出て行ったのも知らず……。

side: ヴィヴィオ off

side: 真紅

彼女がパタパタと駆け出してから、怖いぐらいの静寂がこの部屋を支配した。

その静寂の中、僕は漠然とした嫌な予感を感じていた。そして僕の考えを読んだかのように、ファンガイアの気配がする。

「キバット！」

『おつよー！』

キバットを起こし、部屋を抜けて走り出した。
ヴィヴィオちゃんのお父さんとお母さんは同じ部屋で寝ている様だ。何か嬉しそうな声と呻く様な声がする……。

side:真紅 off

side:ヴィヴィオ

リオ、コロナ、ユースケと会った私は、4人でおしゃべりしながら学校に向かう。毎日この登下校が一番の楽しみなのです！

おしゃべりしていると、一番端に居たコロナが男の人にぶつかってしまう。

「つてえなあゝ！」

「す、すみません……」

こ、怖そう……。

コロナが必死に謝ってるのに、その人は一向に気を治す気配が無い。そしてほっぺにステンドガラスの様な模様が現れ、姿が変わる。まるでシマウマみたいな怪人……。

『おらっ！』

その怪人がコロナの首を掴み、高く掲げる。そして剣を取り出し、コロナに近づけていく……。

「止めてっ！」

私の叫びが届いたのか、何かが怪人を弾いてコロナを助ける。そのまま一人の少年が怪人を蹴り飛ばす。

「真紅……君？」

「えっ？」

確かに真紅君だった。向こうも驚いた様な顔をし、すぐに怪人を睨む。

そして手に小さなコウモリを掴み、自分の左手を噛ませる。

『ガブッ!』

すると真紅君の腰に赤いベルトが巻かれる。

「変身!」

そう叫ぶと、真紅君の姿が変わり、真っ赤なコウモリみたいな戦士になった。

side: ヴィヴィオ off

side off

キバはすぐに走り出し、ファンガイアを蹴り付ける。

すぐ近くにヴィヴィオ達が居る為、あまり長期戦にたくない。
キバは力強くファンガイアを殴ると、すぐに赤いホイッスル、『フ
エッスル』をキバットに吹かせる。

『ウェイク、アープ！』

キバットがキバの右脚の鎖を解き放ち、羽の生えた脚を高く上げ、
左脚をばねにして飛び上がる。

「くあっ！」

その脚でキックを放ち、地上にキバのマークが現れる。
ファンガイアは爆発し、キバも真紅の姿に戻る。

「真紅君……今の……」

ヴィヴィオの言葉に、真紅は何も言わずただ俯いていた……。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ×1

ティラノ×1

第2話 覚醒♪受け継がれるソロパート（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

ヴィヴィオ

「真紅君も、仮面ライダーなんだね！」

真紅

「仮面、ライダー……？」

ユースケ

「なんだこれ！？」

真紅

「見つけるんだ、僕なりの……」

ユースケ

「見てろよ、これが俺の……変身！」

次回、【空我】

お楽しみに！

第3話 空我（前書き）

何気にクウガとオーズって似てる気がするんですよね。

まあこの小説のクウガは全クウガファンを怒らせそうな設定ですが……。

第3話 空我

魔法仮面リリカルオーズ Vivid！ ここまでのハイライト！
『J・S・事件』から4年後、『マリアージュ事件』から1年後
……。仮面ライダーオーズとしてちよいちよい戦い続ける青年、『
高町エイジ』。そして確かに消滅したが、”欲望”により復活した
『アंक』。

『高町なのは』と結婚し、娘の『高町ヴィヴィオ』とも良好な関係
を築き上げていた。

一方その頃ミッドの上空では、巨大な城を背負った龍、『キャツ
スルドラン』から一人の少年と小さなコウモリが落下した……。

そして『フェイトⅡⅡⅡハラウン』が2年前に保護した少年、
『ユースケⅡⅡⅡハラウン』は、ヴィヴィオ達と共に学校に通い
穏やかな日々を過ごしていた。

そんなある日、ユースケ達は地面に突き刺さった人間の様な物を
発見！

同時にヤミーとファンガイアが現れ、エイジはアंकと共に現場
に急いだ。

エイジは『仮面ライダーオーズ』に変身し、二体を相手に戦闘を
開始。その最中、少年『紅真紅』と『キバットバット？世』が現れ、
真紅は『仮面ライダーキバ』へと変身。

戦闘終了後に倒れた真紅を運び、エイジは魔法の訓練をしていた。

目が覚めた真紅はヴィヴィオと軽く会話し、そしてファンガイア
の気配を察知して飛び出す。

そして変身する瞬間をヴィヴィオ達が見ていて……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ×1

ティラノ×1

——通学路

変身を解除した真紅を、ヴィヴィオはじつと見つめる。ユースケとリオがコロナを起こし、肩を貸す。視線に耐え切れなくなった真紅は、ヴィヴィオ達に背を向けて走り出した。

「えっと……あの……ごめんなさいっ！」

「あっ、真紅君！」

ヴィヴィオは物惜しそうに手を伸ばすが、遅刻寸前である事を思い出し、リオを気遣いながら学校に急いだ。

チラチラと後ろを向くヴィヴィオを見ながら、ユースケは胸の奥がチクチク痛むのを感じた……。

○魔法仮面リリカルオーズ Vivid
第3話 空我

——高町家

学校から帰ってきたヴィヴィオは、ラトラーターもビックリな速さで客室に突入した。

ベッドに座ってぼーっとしていた真紅が驚くのもつかの間、ヴィヴィオはすぐさま真紅の両手を握る。

「真紅君も仮面ライダーだったんだね！ すっごいよぉー！！」

ヴィヴィオは興奮して真紅の両手をブンブン振る。そのキラキラとした紅と翠の両眼と白く綺麗な顔を近づけられ、真紅はドギマギして目を逸らす。

「あの……えと……、す、少し近……」

「私のパパも仮面ライダーなんだよ！ うわ、でも同じ位の年の子が仮面ライダーなんてすっごいよぉー！！」

真紅があわあわしながら少し離れてもらおうとするが、そんなの耳に入らないヴィヴィオはさらに顔を近づける。思わず鼻が掠ったので、真紅は慌てて首を90度曲げる。だが今度はヴィヴィオの息が耳に当たり、別の意味で頬が紅潮し始める。

くすぐったさを誤魔化そうと身を振りながら、真紅は先程からヴィヴィオが連呼している単語を聞き返した。

「仮面、ライダー……？」

「うん。皆を守る正義のヒーローの事だよ！」

「でも、僕はヒーローなんかじゃないし……」

「コロナや私達を助けてくれたじゃん！ それって立派な正義のヒーローだよ？」

仮面ライダーと言う言葉の意味をヴィヴィオが簡潔に話し、真紅は自分がそれに当てはまっていないと俯いてしまう。

その顔を下から覗き込み、ヴィヴィオは笑顔を見せる。

あまり女の子と話した事の無い真紅は、目の前の少女が見せる笑顔にただドキキしていた。

それを見て、ヴィヴィオの中に少し悪戯心が芽生えた。

「えいつ！」

「ふえあつ！？」

視線を泳がせる真紅に、正面から抱き付く。突然の抱擁に耳まで顔を真っ赤にする真紅だが、抱きついたヴィヴィオも自分のあまりにあんまりな行動、そして思ったより少年の体がしっかりしていた事に、頬を染めていた。

だが自分から仕掛けた手前、引くわけにはいかないという良く分からないプライドが彼女にはあった。

背骨を指で優しくなぞりながら、耳に息を吹きかける。

「ふう……」

「ひう……！」

その反応が可愛らしく、ヴィヴィオは何だかはやての気持ち良かった様な気がした。

というより、この様な悪戯を仕掛けることに関してははやてとアソクが教えた事なのだが……。

その後もヴィヴィオは真紅にじゃれ付き、部屋に入ろうとしたアソクは無言でドアを閉めたとか……。

——どこかの森

ユースケは、少し大きめのバッグを背負いそこに来ていた。元々この様な探検は大好きな為、とても楽しそうな表情で進んでいた。もつとも、そのせいで2年前より昔の記憶を失い、そこでフェイトに引き取られたのだが……。

そうして居る間にも、ユースケはどこかの洞窟にたどり着いた。

「見つけた！」

そこは1年前の事件発端の地……。

「ゆりかこの跡地！」

落下したゆりかが封印された地。そこにたどり着いたユースケは、迷う事無く中に入っていた。

真つ暗な不思議な画の描かれた洞窟を進んでいると、棺桶の様な物を見つけた。

「なんだこれ？」

ユースケは懐中電灯で何度も棺桶を照らし、ペタペタ触る。そして懐中電灯を置き、棺桶の蓋を動かす。

「んっ！ ～～～～っ！」

とてつもなく重いそれを、ユースケは徐々にずらしていく。半分ほど開くと、そこから白い煙が噴出し始めた。そして洞窟が揺れ、上から小さな石や砂が降り注ぐ。

「なっ！？」

そのまま洞窟は崩れ、ユースケはそれに飲み込まれた。

——高町家

エイジの部屋で、エイジの上になのはが乗った状態で揃って眠っている。ちなみに真紅が聞いた呻き声はエイジのもので、嬉しそうな声はなのはのものだった。

だがふとエイジは目を覚まし、なのはを起こさない様にぬるりとベッドを抜け、ドライバーを引っ掴んで1階に降りる。

「アंक！」

「また出たみたいだなあ〜！」

エイジの右腕にアंकが同化し、エイジは家を飛び出す。出てすぐに置いてあるライドベンダーにセルメダルを入れ、バイクモードにして走り出した。

——ゆりかご跡地

岩で封じられたその場所に、白熊の様なヤミーが出現した。そこにライドベンダーに乗ったエイジが到着し、ヘルメットを外しながら驚いた声を上げる。

「あのヤミーって!？」

「まゝた別のタイプのグリードが出たみてえだなあ……。おいエイジ、これで行け！」

エイジはメダルを受け取り、腰に装着したドライバーにセットす

る。それを傾け、振り上げたスキャナーを滑らせる。

「変身っ！」

【ライオン・クジャク・コンドル！】

エイジはオーズに変身し、ライオネルフラッシャーを放ちながらヤミーに火球を放つ。

「はあっ！」

『あつち！ あつついよコレ！ あぎゃー！』

一々オーバーなりアクションをするヤミーを、容赦なく蹴り付ける。それにより散らばったセルメダルを、アंकが必死になってかき集める。

オーズはメダジャリバーを取り出し、それでヤミーを斬る。火花と共に返り血の様にセルメダルを浴び、オーズは左手に炎を宿して殴る。

その最中、崩落した洞窟から轟音と共に土煙が舞い上がる。

「うえ！？」

「あん？」

オーズとアंकがビックリしてそちらを向くと、土煙の中から黒に白い鎧を纏った金色の角の戦士が現れる。

「けほっ、けほっ……。あゝ、死ぬかと思った」

「クウガ……」

手で土煙を払いながら、戦士はぼやく。声の高さからして、恐らく子供だろう。ヤミーのその呟きは、オーズ達には聞こえなかった。あんた誰やねんと聞きたかったオーズだが、逃げようとするヤミーを視界に捕らえ、メダジャリバーにセルメダルを3枚投入してスキャンする。

【トリプル！ スキャンングチャージ！】

「はあああああ……………セイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

空間ごとヤミーを両断し、ヤミーが爆発すると同時に空間のみが元に戻る。

散らばったセルメダルをアंकが吸収し、オーズは白い戦士に近付く。

「えっと……君は？」

シャチ	×	1
サイ	×	1
クワガタ	×	1
プテラ	×	1
トリケラ	×	1
ティラノ	×	1

第3話 空我（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

ユースケ

「なんだったんだ……？」

エイジ

「やっぱり新しいグリードがいるんだよね……」

アंक

「ああ。誰が作ったのか……」

真紅

「僕も……戦います！ 正義のヒーローとして！」

エイジ・真紅・ユースケ

「変身っ……！」

次回、【王と牙と空】

お楽しみに！

第4話 王と牙と空（前書き）

OP

『Bleak the Chein』

挿入歌

『Anything goes!』

ED

『青空になる』

といった感じの曲を聴きながらと、より楽しめると思います。

第4話 王と牙と空

魔法仮面リリカルオーズVivid！ 前回の三つの出来事！

一つ！ ヴィヴィオと真紅が高町家に戻り、二人でじゃれ合う！

二つ！ ユースケは、大荷物を背負いながら単身ゆりかご跡地へと向かう！

そして三つ！ ヤミーの気配を察知してゆりかご跡地まで来たエイジとアंकの前に、謎の白い仮面ライダーが現れた……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

才と仲の良い少年の名を呟く。

「えっと……、これ、どうやって戻るんですか……？」

「えっ！？ えっつとお……？ も、戻れって強く思えば戻るんじゃない？」

突然答え様の無い質問をされたエイジは、曖昧に首を傾げながら答える。

するとクウガは腕をだらりと下げ、大きく深呼吸する。そして叫ぶ。

「戻れっ！」

その叫びに反応するかのように、クウガの変身が解除され、『ユースケ』A『ハラオウン』が姿を現す。

「ぷはあ……。ああ、戻ったあ……」

首や肩をトントンと叩き、親父臭い発言を繰り返すユースケ。そんなユースケを視界の端に見ながら、エイジはアंकに耳打ちする。

「アंक……、やっぱり、新しいグリードが……？」

「どうやらそうらしいなあ……。ったく、また面倒な事が起きそうだな……」

エイジもアंकも、ウヴァ達とは違うグリードの存在を察知していた。

腰をトントンと叩くユースケを見ながら、エイジはドライバーを撫でた。

「新しい仮面ライダーも、まだいたりするのかな……?」

「さあなあ……」

そんな3人の姿を、一つの影がじつと見つめていた。影はエイジ達に背を向け、どこかに去っていった。

3枚のメダルを指で弾きながら……。

○魔法仮面リリカルオースViVid

第4話 王と牙と空

——高町家・リビング

エイジとなのはは夕飯の支度をし、驚いて口を開けっ放しにしているヴィヴィオの正面に、リラックスしたユースケが座る。真紅はヴィヴィオの隣に座り、キバットと折り紙をして遊んでいる。

キッチンから美味しそうな香りが鼻腔をくすぐる中、ヴィヴィオの開きっぱなしの口をユースケが指摘する。

「おいヴィヴィオ。口閉じろいい加減……。可愛い顔が台無しだぞ？」

「にやっ!？」

不意に可愛いと言われ、顔を真っ赤にして肩を跳ねさせるヴィヴィオ。それを見て薄く笑い、ユースケは椅子の上で胡坐をかく。

「んで? お前等も聞きたい事あるらしいけど、まず俺も聞きたい事がある。最初にそこのお前!」

「はい？」

「ユースケ！ 真紅君だよっ！」

ユースケはまず、真紅を軽く睨む。だがその程度で臆する真紅ではなく、むしろ急に話しかけられて素っ頓狂な声を漏らす。

「お前あん時地面に突き刺さってた奴だろ？ 何でヴィヴィオン家に居るんだよ……」

登校中に見た謎の物体を思い出しながら言うユースケ。ヴィヴィオは二人を交互に見つめているが、ユースケは内心ヴィヴィオの事が気になっていた。何もされていないか、こんな奴を好きになっていないかとか……。

「えっと……、実は理由は僕にも良く分からなくて……。気が付いたらこの世界に居て、気が付いたらこの家にお世話になって……」

「はあ！？ 何だそれ！？」

「私がパパにお願いしたの。真紅君は私達を助けてくれた命の恩人だもん」

おどおどと話す真紅に、ますます苛立つユースケ。そこにヴィヴ

イオが割って入り、満面の笑みで真紅の右腕を抱きしめる。真紅は顔を真っ赤にしながら、必死にヴィヴィオに視線を向けまいと顔を逸らす。

というのも、腕にはヴィヴィオの発展途中な胸が当たり、そちらを向けばそれが嫌でも目に入ってしまうからだ。

それを見ながら、ユースケはテーブルの下で拳を震わせる。

「で？ ユースケは何でウチに来たの？」

今度は逆に、ヴィヴィオがユースケに質問した。

「俺？ そりやお前、俺も仮面ライダーになっただけになっ！」

ヴィヴィオの質問に、胸を張って答えるユースケ。それを見て、ヴィヴィオはジト目になる。

「なっ、何だよその目は！」

「だって信じらんないんだもん。ユースケが仮面ライダーなんて……」

「なっ！？ じゃあ今ここで見るか！？ 俺の変身っ！！」

ヴィヴィオの疑いっばなしの発言と視線に、ユースケは立ち上が

って講義する。そして変身しようとするが、その前に夕飯が置かれる。

「まあまあ。とりあえず落ち着いて」

エイジがユースケを宥め、椅子に座らせる。四角いテーブルに、ヴィヴィオとエイジ、真紅とユースケが対角線上に座る。なのははいわゆる社長席で、4人を見守っている。

「二人とも仮面ライダーで、戦っていつって意志はあるんだよね？」

「もちろんですっ！」

「僕は元々、そういう運命ですから……」

エイジの質問に、ユースケは元気良く、真紅は少し俯きながら答える。エイジはあえてそこは追求せず、話を進める。

「仮面ライダーになって変身するなら、まずその変身の意味を考えたね」

「「変身の意味？」」

エイジが発した言葉に、真紅とユースケが同時に首を傾げる。そして互いの顔を見て、また逸らす。

「そ。俺の場合は、『俺はこれから人間ではない異形に変わるんだ』っていうのを、自分や周りの人に言い聞かせる為、とか。

『変身して、戦うぞ！』って言うのを相手に示す為だったり……。後は変身しても、『これが俺だ！』って言うのを、覚えていて欲しかったり。もしかしたらその戦いで死んじゃうかもしれない。だから周りの人に、今戦っているのが俺なんだっていうのを覚えていて欲しいから。自分が自分であった事を証明する為に叫ぶ、ってとこかな？」

朗らかな笑顔を見せつつも、真剣に言葉を続けるエイジ。以前一度聞いたことのあるのはですら思わず箸を止めてしまう。ヴィヴィオもそれを聞いて拳を握り、ユースケと真紅は下を向いて考えていた。

自分なりの、『変身』。

その意味、その思い。それをずっと考えていた。

長く冷たい沈黙が流れる。

「……ほら、冷めない内に食べちゃおう？」

重たい空気を子供3人に味わわせなくなかったのか、なのはがそう切り出す。エイジも箸を手取るが、またもヤミーの気配を察知

する。

「エイジ！」

「ああ！」

アंकも駆けつけ、エイジとアंकはすぐさま走り出した。ユースケと真紅はその背中を見ながら、居てもたっても居られず走り出した。

残されたのはヴィヴィオは、互いに黙りこくっていた。

「……男の子って、元気だね」

「……元気すぎてしょっちゅう旅に出るのも困り者だけだね……」

ポロツとヴィヴィオが漏らした言葉を聞き、なのはが黒いオーラを纏う。背筋が凍るのを感じたヴィヴィオだが、不意になのはが尋ねた。

「ところでヴィヴィオ？ ユースケ君と真紅君、どっちの事が好きなの？」

「にゃっ！？ な、ななな何言ってるのママ！ わ、私別にそんな事……」

「ふう〜ん……。ユースケ君はこうガツガツ系って感じだし、元氣って意味ではヴィヴィオと気が合うかもね。あ、でもヴィヴィオ弟欲しいって言ってたもんね。だったら真紅君みたいな草食系の方が好みなのかな？」

「も〜！ ママ！」

さっきまでとは打って変わり、耳まで真っ赤にしてなのはに講義するヴィヴィオ。両腕を振り上げて起こる姿が可愛らしかったのか、なのはは思わず吹き出してしまった。

ペンギンの様なヤミーの前に立ち、エイジ、ユースケ、真紅が並び立つ。

「俺、まだ変身の意味なんて分からないけど……。けど戦います！こんな奴等の為に、もう誰かの涙は見たくない！」

「僕も戦います。ヒーローとして……。みんなの音楽を守る為……」

ユースケと真紅の答えを聞き、エイジも安心したのか笑みを浮かべる。

エイジはドライバーを腰に巻きつける。ユースケは腰に手を翳し、

体内からベルト、『アークル』を出現させる。真紅も手を振り上げ、キバットを呼ぶ。

「キバット！」

『イエーイ！ 祭りだ祭りだあゝ……んガブッ！』

真紅の腰にも、『キバツクル』が巻かれる。エイジはメダルを入れてスキャナーを振り上げ、ユースケは右手を顔の左から右に移動させる。真紅はキバットを突き出し、3人は同時に叫ぶ。

「『変身っ！！！』」

【クワガタ・クジャク・コンドル！】

エイジはオーズ、ユースケはクウガ・グロージングフォーム、真紅はキバに変身し、3人の仮面ライダーは同時に走り出した。

「はっ！」

最初にオーズが火球とクワガタヘッドからの電撃でペンギンヤミイを攻撃する。その硝煙に紛れ、クウガが突進する。

「おりやあああ！」

すさまじい勢いで殴りつけ、ヤミーが後退する。入れ替わる様に、キバの回し蹴りが炸裂する。

「くあっ！」

その攻撃でヤミーの体が数枚のセルメダルが零れる。その後もキバが重い一撃を決め、ヤミーを追い詰める。

「とりやああああ！」

クウガも負けじとヤミーを何度も殴りつけるが、威力の差は歴然だった。それでもクウガは、何発も拳を叩き込む。

「一発でダメなら、何発もっ！」

数十発殴った所で、ようやくヤミーの体からセルメダルが1枚零れる。クウガは止めを刺そうと、右脚に力を込める。そして走り出し、空中で一回転してキックを叩き込む。

「おりやあああああああああ！」

一瞬クウガのマークが現れ、すぐに引っ込む。だがクウガはヤミ
ーを蹴り、逆方向にあった壁を蹴ってもう一度キックを叩き込む。
再びクウガが戻ると、今度は周囲が暗くなる。

『ウエイク、アープ！』

キバの脚が展開され、キバの必殺技『ダークネスムーンプレイク』
が炸裂し、ヤミーがセルメダルの上となった。

3人の仮面ライダーは変身を解除し、笑みを零した。

そんな3人を、再び誰かが見つめていた。

「オーズ、クウガ、キバ……か」

影はそう呟き、どこかに消えた……。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ×1

ティラノ×1

第4話 王と牙と空（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

真紅

「ストライクアーツ？」

ヴィヴィオ

「うん！ 真紅君も一緒にどう？」

リオ

「何だユースケ？ ヴィヴィオにフられたのか？」

ユースケ

「うっせー！」

コロナ

「真紅君……カッコイイよね……」

？

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェⅡナカジマさんとお見受けします」

次回、【運命#その力はメゾピアノ】
お楽しみに！

第5話 運命#その力はメソピアノ（前書き）

今回は変身なし！

でも結構色々登場……

第5話 運命#その力はメソピアノ

魔法仮面リリカルオーズ Vivid！ ここまでのハイライト！
『J・S・事件』から4年後、『マリアージュ事件』から1年後
……。仮面ライダーオーズとしてちよいちよい戦い続ける青年、『
高町エイジ』。そして確かに消滅したが、”欲望”により復活した
『アंक』。

『高町なのは』と結婚し、娘の『高町ヴィヴィオ』とも良好な関係
を築き上げていた。

一方その頃ミッドの上空では、巨大な城を背負った龍、『キャツ
スルドラン』から一人の少年と小さなコウモリが落下した……。

そして『フェイトⅡⅡⅡハラウン』が2年前に保護した少年、
『ユースケⅡⅡⅡハラウン』は、ヴィヴィオ達と共に学校に通い
穏やかな日々を過ごしていた。

そんなある日、ユースケ達は地面に突き刺さった人間の様な物を
発見！

同時にヤミーとファンガイアが現れ、エイジはアंकと共に現場
に急いだ。

エイジは『仮面ライダーオーズ』に変身し、二体を相手に戦闘を
開始。その最中、少年『紅真紅』と『キバットバット？世』が現れ、
真紅は『仮面ライダーキバ』へと変身。

戦闘終了後に倒れた真紅を運び、エイジは魔法の訓練をしていた。

目が覚めた真紅はヴィヴィオと軽く会話し、そしてファンガイア
の気配を察知して飛び出す。

ヴィヴィオはあっさりと真紅を受け入れ、じゃれ付く。

その頃ユースケは単身ゆりかご跡地に潜入。

そこで駆けつけたエイジが見たものは、『仮面ライダークウガ・グロージングフォーム』に変身したユースケだった！

エイジは真紅とユースケに仮面ライダーについて話し、3人は変身し続ける事を誓うのだった……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ × 1
トリケラ × 1
ティラノ × 1

——高町家

エイジ、アंक、なのは、フェイト、真紅が見守る中、ヴィヴィオは庭で魔法陣を展開する。その横に、白いウサギのぬいぐるみが浮遊している。

「……マスター認証高町ヴィヴィオ。術式は、ベルカ主体のミッド混合ハイブリッド」

ヴィヴィオの髪が舞い上がり、ウサギの身体も薄く輝く。

「マスコットネーム愛称、クリス。正式名称、セイクリッドハート！」

ヴィヴィオが言ったデバイス名に、なのはが少し嬉しそうな顔をする。エイジはどこからかメダガブリューを取り出し、ガブリューにその光景を見せる。

「行くよセイクリッドハート！ セー……ット・アー……ッブー！！」

ヴィヴィオは元気良くクリスを掲げ、体が光に包まれる。眩しい光が止むと、大人に成長したヴィヴィオが凜と立っていた。

「やった！ できたよママー！」

「うん。バッチリ！」

大人ヴィヴィオは元気に飛び跳ねながらのはの下に駆け寄る。ビックリしてへなへなと座り込むフェイトをよそに、ヴィヴィオは真紅を見下ろす。

「見て見て真紅君！ ヴィヴィオ大きいでしょー！」

「う、うん……。大きい……。ね……。？」

確かに色々大きい。真紅自身も変身したら大きくなっているのだが、自分がするのと相手がするのでは大分違うらしい。それを言うてしまえば、この間ユースケも変身して大人サイズになっているのだが。

そんな事を考えていると、ヴィヴィオは真紅の頭をぎゅっと抱き

しめた。

「んごっ！？」

「えへへ♪ 真紅君ぬいぐるみみたい♪」

大人ヴィヴィオの母親を上回る豊満な胸に、真紅の頭がすっぽりと納まる。真紅は嬉しいやら恥かしいやら呼吸が出来ないやらで顔を真っ赤にしているが、ヴィヴィオはそんな事に構わず真紅をぬいぐるみの様に抱き続ける。

「ママ！ ホントにありがとうー！」

「どういたしまして。後、お礼ならちゃんとマリーさんにも言うんだよ？」

「はい！」

「んごっ！ もごもっ！」

「んっ……、真紅君、くすぐったいよぉ……」

ヴィヴィオは真紅を抱いたままなのはに礼を言う。なのほも笑顔で返し、ヴィヴィオと話を進める。

真紅が途中で抵抗するが、ヴィヴィオが甘い声を漏らした為上手く力が出ずにいた。

まあ本人も本気で抵抗する気は無い様だが……。

「どうガブリュー？
凄いやねあれ！」

【全くだな。つつか、ヴィヴィオちゃん成長しすぎじゃね？ あんなベッピンさんになっちまって】

「はっ！ 中身はまだまだ子供だなあ」

「アंक、親父臭いよそれ」

「……っせえ！」

「いつ……」

エイジがメダガブリューに話しかけると、メダガブリューの上顎がバツクンバツクン動きメダガブリューが喋る。流暢にメダガブリューと話しているエイジに、アंकが割って入る。アंकをからかったエイジは、右腕……もとい全身を使った動きで頭を叩かれる。ヴィヴィオは真紅を抱きしめながらなのはと楽しげに話している。そんな中、放置され続けたフェイトが口を開く。

「う え え え え え え え え え え え え え え え え え え え
え え え え ! ?」

夜遅い時間に、金髪美人の絶叫が周囲に響き渡った。

・ ・ ・ ・

——その頃ハラウン家

「フェイトさん、遅いなあ……」

ユースケが一人、腹を空かせてテーブルに突っ伏していた……。

○魔法仮面リリカルオーズ Vivid
第5話 運命#その力はメゾピアノ

——競技場

赤い髪の活発そうな女性、『ノーヴェⅡナカジマ』と、もう一人赤髪の女性『ウェンディⅡナカジマ』共に、ヴィヴィオ、リオ、コロナ、ユースケ、真紅は競技場に来ていた。

元々ヴィヴィオはノーヴェに師事し、コロナとユースケもそれに付き合っていた事があった。その話を聞いていたリオもフォルテツシモなテンションで付いていく事になり、ヴィヴィオの推薦で真紅も来る事になった。

「あの……ストライクアーツってなんですか？」

「ああーっと、用は競技人口の多い有名な格闘技だ。魔法技術だけじゃなくて体術も求められる世の中だから……」

「ま、誰でも気楽に始められるスポーツっすよ！」

「へえー……」

真紅の質問にノーヴェが答え、ウェンディがウィンクしながら補足する。

真紅が納得していると、ついに競技場内部に入った。

「ふわあ〜……！」

その人工の多さに、真紅は感激のため息をつく。

様々な所で様々な年代、性別の人が格闘技を行っている。ヴィヴィオ達も早速着替える為、更衣室に向かった。

「じゃ、さつさと着替えよーぜ」

「「「はあ〜い！」「」」

「良し行こう！」

ノーヴェの言葉にヴィヴィオ、リオ、コロナが答え、ユースケもその後に着いていく。無論、女子更衣室に向かつて。

「「「っておいっ！」「」」

「「「ふっ！」」

ヴィヴィオとリオの見事な裏拳が炸裂し、ユースケは鼻血を出しながら男子更衣室に吹き飛んでいった。真紅は慌てて着替えを入れたバッグを握り、そちらに走り出した。

「でも真紅君はこっちでも良いよ？ 可愛いし」

「そーいうの良いから！」

――男子更衣室

鼻血の収まったユースケと真紅が着替えをしている。

「じゃあ、ユースケ君もストライクアーツは得意なの？」

「得意っつーか……ま、人並みだな。ヴィヴィオ達があれでうめーからな」

たまに胸とか当たるんだぜ、とスケベな笑みを浮かべるユースケ。
対する真紅は先日の事を思い出し顔が真っ赤になる。

ユースケは着替えを済ませ、出口に向かっていた。

「真紅、お前も早く来いよ」

そう言つてユースケは真紅に背中を向けた。
慌てて着替えを済ませてそれを追う真紅だが、人ごみのせいで見失つてしまう。

「あれ？ ユースケ君どこかな……ん？」

すると人ごみの奥に、妙な団体を発見した。それに近付いてみると、なにやらラジオ体操の様な事を行っている様だ。そして後ろから謎の男性に掴まれる。

「さあ、君もイクササイズをやりなさい！」

「いや、あの、僕……」

「私の後に続きなさい！ ブンブン振りなさい！」

「ですから……その……えっと……」

男性に強制的に参加させられるが、人見知りの真紅は上手く反論できず、結局そのまま最後までイクササイズをする事になった……。

——その夜

ヴィヴィオ達は、良い汗を掻いた様ですがすがしい笑顔で歩いていた。だがただ一人、真紅だけはぐったりと疲れている様だった。

「真紅君、大丈夫？」

「っ、疲れた……」

コロナが心配そうに聞き、真紅の体を支えながら歩く。

「あ、私も！」

ヴィヴィオもコロナと反対側から真紅の体を支える。それを見ながら、リオがユースケに呟く。

「なんだユースケ？　もしかしてヴィヴィオにフられたのか？」

「なっ！　バカ言ってんじゃねえ！」

からかう様に聞くと、ユースケは顔を真っ赤にして反論した。ノーヴェはウェンディにヴィヴィオ達を任せ、自分は警備隊の確認がある為逆方向に歩き出した。

「んじゃ、お疲れ!」

「「「「「お疲れ様でした!」」」」」

「お、お疲れ……ました」……」

ノーヴェが一人歩いていると、突然上から声をかけられた。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ!! ナカジマさんとお見受けします……」

「っ!」

その声に、ノーヴェはすぐさま構えをとる。

彼女は『霸王・イングヴァルト』を名乗り、聖王・オリヴィエのクローンと冥府の炎王・イクスヴェリアの所在を聞いてきた。
が、ノーヴェは答える事を拒否した。

「そうですか……。ではもう一つ……、あなたの拳と私の拳、いつたいどちらが強いのでしょうか……?」

その言葉を聞くや否や、ノーヴェは表情を変えて構える。すると、二人の間に1枚のメダルが転がる。

「とつとつと！ あ、割り込みゴメンね」

「エイジ！？」

追いかけてきた男性の顔を見て、ノーヴェが素っ頓狂な声を上げる。エイジはそれに眩き、イングヴァルトの方を見る。

「あなたは……聖王ではない……王……？」
オース

エイジの握っているコアメダルを見て、イングヴァルトは驚いた声を上げる。

「うん、そういう事になるかな。それでどう？ 相手が俺じゃ不服かな？」

「おい！ あたしが売られた喧嘩だぞっ！？」

エイジの申し出に、ノーヴェが反論する。するとエイジは軽くノーヴェの方を向き、ウィンクを見せる。ノーヴェはそれを見て頬を

染め、そのまま食い下がる。

「で、どうかな？」

「……喜んでお受けいたします」

イングヴァルトはそう答え、二人は同時に構えた……。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プ	トリ	ティ
テ	ケ	ラ
ラ	ラ	ノ
×	×	×
1	1	1

第5話 運命#その力はメソピアノ（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

イングヴァルト

「ここは……？」

真紅

「……綺麗な人だなあ……」

ヴィヴィオ・コロナ

「「むう」……」

エイジ

「どう？ オースアーツ 王達の流派！」

真紅

「変身っ！」

次回、【流派】

お楽しみに！

第6話 想い（前書き）

すみません、タイトル変更しました。

第6話 想い

魔法仮面リリカルオーズ！ 前回の三つの出来事！

一つ！ ヴィヴィオは自身のデバイスセイクリッドハートを手に入れ、エイジもメダガブリューをデバイス化させる！

二つ！ ヴィヴィオの誘いでストライクアーツを始める事になった真紅！ だが途中、謎の男性に捕まってイクササイズに巻き込まれる！

そして三つ！ 警備隊の確認に行く途中のノーヴェの前に、イングヴァルトと名乗る少女とエイジⅡヒノが現れた……！

カウント・ザ・メダルズ！
現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

――深夜

エイジとノーヴェから数メートル離れた所で、イングヴァルトと名乗った少女が構えている。エイジもノーヴェを下がらせ、腰を深く落とす。左脚を前に出し、後ろに引いた右腰に右手を置き、そこに左手を翳す。

「こっちはオツケーだよ！ そっちは？」

「いつでもどうぞ……」

エイジの言葉に、イングヴァルトが冷静に返す。
そしてノーヴェが間に立ち、腕を上げる。

「それじゃ……。レディー……ゴー！」

腕を振り下ろすと同時に、イングヴァルトが猛スピードで突っ込んでくる。

エイジは構えを解かず、足元に紫の魔法陣が展開される。右腕から発生する風を見て、ノーヴェが慌てて叫ぶ。

「お、おいエイジ！　ちゃんと手加減しろよ！？」

「分かってる！」

その言葉を聞いたイングヴァルトは、不快な表情をしてエイジの懷を殴り付ける。

魔法陣を展開した場所から吹き飛んだエイジは、背中を街灯に直撃させる。

「……馬鹿にしているのですか……？」

そう呟くイングヴァルトの表情からは、怒りが込み上げている様に見える。土煙の中、構えを解かずエイジが姿を現す。

「ゴメンゴメン。じゃ、全力で……！」

足元に紫のベルカ魔法陣。右手には赤、黄、緑のリングが出現する。

エイジが徐々に構えを深く、目を閉じるのに合わせ、周囲の木々もざわめく。それに氣付いたイングヴァルトは、独自の構えをとる。エイジは目を開き、左手を前に突き出す。それを引きながら握つた拳を勢い良く突き出す。

「セイツ……ヤアアアアアアアアアアアアアアアア
アアア！」

突風を巻き起こしながら、赤紫色の魔力弾がイングヴァルトの横を通り抜け、後ろにあった木の幹に激突する。

その余波で来た暴風に、イングヴァルトが吹き飛ばされる。木にぶつかった魔力弾が跳ね返り、イングヴァルトの背中に直撃する。それを食らったイングヴァルトは、気を失った様に倒れた。そして体が輝き、イングヴァルトがいくらか小さな少女の姿になる。

「^つ!？」

きよんとするエイジとノーヴェ。

目の前で倒れている少女と、その横に落ちているコインロッカーの鍵を見ながら、エイジは呆然と立ち尽くした。

○魔法仮面リリカルオーズ Vivid
第6話 想い

――ナカジマ家

そのベッドで、イングヴァルトは目を覚ました。

「……は……？」

「よお。目え覚めたか？ 自称霸王イングヴァルト」

その横で転がっていたノーヴェが、横にいる少女に茶化す様に言う。すると橙色の髪の女性、『ティアナ』ランスターがひょっこり現れ、ナイトデスクに置かれた服とカバンを指す。

「ゴメンね、コインロッカーの荷物ださせてもらったの」

「学生手帳持ち歩いてるたあ、随分とぼけた霸王もいたもんだなあ？」

少女は自分の荷物を見て、その一番上に置かれた自分の生徒手帳を見る。

ヴィヴィオ達と同じ学校の中等部に所属する、『アインハルト』ストラトス』。それが彼女の招待らしい。

「が、学校帰りだったんです。それに、あんな所で倒れるなんて……」

その後家の主、『スバル』ナカジマ』と軽く話をし、アインハルトは自重聴取やらなんやらの為近くのセンターに向かった。

——数日後

ヴィヴィオ、リオ、コロナ、ユースケ、真紅の5人は、ノーヴェに呼ばれて行きつけの格闘場に来ていた。

しばらく待っていると、ノーヴェに連れられてアインハルトが現

れる。

「アインハルト＝ストラトス。参りました……」

「高町ヴィヴィオです！ よろしく願いしますっ！」

アインハルトはヴィヴィオと握手し、ヴィヴィオの瞳をじっと見つめる。

（紅と翠のオッドアイ……。間違いなく聖王のもの……。けど、この小さな手、脆そうな体……）

少しして、ヴィヴィオとアインハルトは反対側に立つ。

ノーヴェのゴングと共に、ヴィヴィオが猛スピードで突進する。それを受け止めながら、アインハルトは少し悲しげな表情をする。

（真っ直ぐな技、真っ直ぐな瞳……。やっぱり、この人は……）

アインハルトは身を低くし、ヴィヴィオの胴体を張り手の要領で突き飛ばす。ヴィヴィオは壁に激突しながらも、興奮に目を輝かせる。

（凄いつ……！）

が、アインハルトはヴィヴィオに背を向けて歩き出してしまった。

「ありがとうございました……」

それに驚いたヴィヴィオは思わず立ち上がり、アインハルトに向かって叫ぶ。

「あ、あのっ！ 私、何か失礼をしてしまったのでしょうか……？」

「いえ、十分に楽しめました。趣味と遊びの範囲でなら、十分に……」

そう言って、アインハルトは去ってしまった。

「今のスパーが不真面目に見えたなら謝ります！ 次は、次は全力でいきます！ 今すぐじゃなくても、来週でも、来月でも！」

「……」

ヴィヴィオの必死の言葉に、アインハルトも止まって唇を噛み締める。それを見ながら、真紅は何か引つ掛かるものを感じた。

埒が明かないと判断したノーヴェは、頭を掻きながらこう言った。

「ああ、じゃあなんだ。来週も一回やっか？ 場所は抑えとくから、その時は全力で。お前もそれで良いか？」

「……はい」

アインハルトが頷くのを見て、ヴィヴィオはほっと胸を撫で下ろした。

「……似てるんだ、あの人……」

真紅は、アインハルトの横顔を見ながらそう呟いた。

アインハルトを見送りながら、ノーヴェはヴィヴィオに念話を飛ばした。

（悪いなヴィヴィオ。気を悪くさせちゃって……）

（ううん！ 私の方こそごめんなさいだから……）

そう言って無理に笑顔を作るヴィヴィオ。真紅は何かを考え、アインハルトに向かって走る。

「あの！ ……えと……、家まで、僕が送ります……」

その言葉に、周囲が一瞬沈黙した。

真紅はアインハルトの横を歩く中、互いに口を閉ざしている。やがて、意を決した様に真紅が切り出した。

「……あつ、自己紹介まだでしたね。僕は、紅真紅」

「……アインハルト」ストラトスです」

「……」

「……」

互いに名前を言った後、再び重い沈黙が流れる。
キバットでも呼びたくなつた真紅だが、再び何とか口を開く。

「……僕、言いたい事が上手く言えないんです。何をやっても不器用で、友達も全然出来なくて……」

「……分かります。私も……友達はあんまり……」

真紅が自分の事を話すと、釣られてアインハルトも話し始める。
真紅はそれに味を占めたのか、話を続ける。

「僕、元々ミッドチルダの出身じゃないんです。全然違う世界から、偶然来ちゃって。まあ、元の世界にもあんまり友達はいないんで、そんなに未練はないんですけど……」。

それで、その……。僕、最初にできた友達が……、さっきのヴィオちゃんなんです。友達が出来ると、友達を守りたいって思うんです。それで友達を守りたいって思うと、もっと強くなれるんです……」

いつもと違い饒舌に話す真紅の言葉に、アインハルトは黙って耳を傾ける。

「だから友達ができるって事は、強くなるって事なんだと思います。……だから……えと……」

そこまで言うと、真紅は突然もごもごし始めた。どうやら何を言

おうとしたのか忘れてしまったらしい。

そうこうしてる内に、アインハルトの家に着いてしまった。

自分に背を向けて歩いていくアインハルトに、真紅は再度口を開く。

「もし良かったら！ ……僕と、友達になってもらえますか……？」

「……時間を下さい。もう少しだけ……」

真紅の言葉に、アインハルトはそう言い残して家の中に入っていた。

残った真紅は、どこか晴れ晴れとした表情で歩き出した。

後日、湾岸闘技場にヴィヴィオは立っていた。リオやコロナ、真紅、ユースケ、元ナンバーズやスバル、ティアナも来ている。

「お待たせ致しました」

そう言って、遅れてアインハルトがやって来る。

「アインハルト」ストラトス、参りました」

「よろしくお願いします！」

そう言うアインハルトに、ヴィヴィオはペコリと頭を下げる。それを見ながら、アインハルトはチラッと真紅を見る。

真紅もそれに気付き、口パクで頑張つて、言いながら手を振った。

すると何を思ったのか、ユースケが真紅の手を引っ張って走り出す。

「ユースケ君！？」

「もう我慢できねー！ 真紅、一回俺と闘やってみようぜ！」

そう言うのが早いか、ユースケは真紅をヴィヴィオ達から少し離れた所に連れ出す。

真紅はしきりに背後を気にするが、ユースケは既にアークルを腰に出現させている。

ヴィヴィオとアインハルトが大人モードになるのを見て、真紅は右手を高く上げる。

「キバット！」

『久々に祭りだあゝ！ ガブッ！』

真紅の腰にキバツクルが巻かれ、ユースケも右手を顔の右側までスライドする。

「「変身っ！！」」

二人が同時に叫び、それぞれの変身プロセスを踏む。真紅は『仮面ライダーキバ・キバフォーム』に変身。

グローイングフォーム
ユースケは、白い姿ではなく、真っ赤な姿に変身する。

「その姿は！？」

「へへっ、特訓してたのは、ヴィヴィオだけじゃねーっ！事だよ！」

『仮面ライダークウガ・マイティフォーム』に変身したユースケは、キバに向かって猛スピードで突進する。

・ ・ ・ ・

数分経ち、キバもクウガも荒い呼吸をしていた。
気が付くと、キバはアインハルトの横、クウガはヴィヴィオの横に立っていた。キバが二人に背を向けるように立っていたので、キ

バが防戦一方だった事が分かる。

クウガは右脚に力を込め、ヴィヴィオと同時に最後の一撃を放ちに行く。

「ああああっ！」

「だああああ！」

キバはクウガを迎え撃つ為、赤いフエッスルをキバットに吹かせる。

『ウエイク、アープ！』

キバとクウガは飛び上がり、『ダークネスムーンブレイク』と『マイティキック』が激しくぶつかり合う。

アインハルトもヴィヴィオも技を受け止め、懐に拳を叩き込む。

「霸王……断空拳！」

周囲をすさまじい爆風が包み込み、勝敗が判明した。

「きゅ……」

目をグルグル回して倒れているヴィヴィオとユースケ。

アインハルトはゆっくりヴィヴィオに近付こうとするが、途中でふら付いて倒れそうになる。

「あっ……!!」

それに気が付いた真紅がアインハルトを抱き止める。そして互いの顔を見た瞬間、激しい運動の後である事とは別に頬が熱くなるのを感じる。

真紅はアインハルトを支えながら、ゆっくりヴィヴィオに近づける。

「……初めましてヴィヴィオさん。アインハルト」ストラトスです」

気絶しているヴィヴィオの手をとりながら、アインハルトはそう言う。

「いや、それって起きてるときに言わなきゃ意味無いんじゃない?」

「恥かしいから嫌です……」

真紅の言葉に、アインハルトはそっぽを向く。そしてアインハルトがヴィヴィオを、真紅がユースケを背負い、互いの家まで送り届けた。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）
クジャク×1
コンドル×1
ライオン×1
シャチ×1
サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

第6話 想い（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

エイジ

「君は……？」

？

「仮面ライダー……アマテラス」

キバット

『ダメもとで呼んでみるか……キャッスルドラーン！』

真紅・ユースケ

「「変身っ！」」

【ガゼル・パンダ・カンガルー！】

次回、【青龍と城龍と新ライダー】
お楽しみに！

第7話 青龍と城龍と新ライダー

魔法仮面リリカルオーズ Vivid！ ここまでのハイライト！
『J・S・事件』から4年後、『マリアージュ事件』から1年後
……。仮面ライダーオーズとしてちよいちよい戦い続ける青年、『
高町エイジ』。そして確かに消滅したが、”欲望”により復活した
『アंक』。

『高町なのは』と結婚し、娘の『高町ヴィヴィオ』とも良好な関係
を築き上げていた。

一方その頃ミッドの上空では、巨大な城を背負った龍、『キャツ
スルドラン』から一人の少年と小さなコウモリが落下した……。

そして『フェイトⅡⅡⅡハラウン』が2年前に保護した少年、
『ユースケⅡⅡⅡハラウン』は、ヴィヴィオ達と共に学校に通い
穏やかな日々を過ごしていた。

そんなある日、ユースケ達は地面に突き刺さった人間の様な物を
発見！

同時にヤミーとファンガイアが現れ、エイジはアंकと共に現場
に急いだ。

エイジは『仮面ライダーオーズ』に変身し、二体を相手に戦闘を
開始。その最中、少年『紅真紅』と『キバットバット？世』が現れ、
真紅は『仮面ライダーキバ』へと変身。

戦闘終了後に倒れた真紅を運び、エイジは魔法の訓練をしていた。

目が覚めた真紅はヴィヴィオと軽く会話し、そしてファンガイア
の気配を察知して飛び出す。

ヴィヴィオはあっさりと真紅を受け入れ、じゃれ付く。

その頃ユースケは単身ゆりかご跡地に潜入。

そこで駆けつけたエイジが見たものは、『仮面ライダークウガ・グロージングフォーム』に変身したユースケだった！

ストライクアーツを学んだ真紅と、霸王・イングヴァルトこと『アインハルト・ストラトス』と遭遇したエイジ。

同じ王の血を引くヴィヴィオとアインハルト、そしてマイティフォームへと覚醒したユースケのクウガと真紅のキバが、互いの拳をぶつけ合った……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

——St・ヒルデ魔法学院

「……大ピンチだ……」

「うん……」

「何で入学してすぐ……」

ユースケ、リオ、真紅が呻いていた。

もうすぐ夏休み。だがその前に、ここまでの実力テストがあるそうなのだ。

常に成績は学年全体でトップ10に入っているコロナと、クラス内でならトップ3に入るヴィヴィオはともかく、それよりも低いリオ、つい先日入学してきた真紅、そして成績は常に赤点スレスレもしくは赤点のユースケには地獄のイベントであった。

「まあまあ。でも真紅君は結構飲み込み早いよね。これならテストも大丈夫だよ」

「そ、そうかな……？」

「いいゝなあゝ、ちょっと分けてよ真紅うゝ」

「うわっ！？ リ、リオちゃん止めてよ……」

コロナがそう言うと、真紅は頬を微かに赤らめる。それを聞いたリオは、隣に座る真紅に頬擦りを始める。

「リオ、真紅君嫌がつてるじゃん……」

そんなリオに、少しむすっとした表情のコロナが注意する。リオは真紅から離れ、隣で頭を抱えながらヴィヴィオに勉強を教わっているユースケを見やる。

「だからね？ ここはさっきの公式を使って……」

「？ ……ううゝ……」

ヴィヴィオは時折ユースケの表情を伺うが、ユースケはじっとノートを見て唸っているだけだった。

それを見てニンマリしたリオはユースケの耳元で囁いた。

「良かったな〜ユースケ？ 大好きなヴィヴィオに教えてもらえて」
「なっ！？」

リオの言葉に、顔を真っ赤にして立ち上がるユースケ。

「あれ？ もしかして図星？」

「り〜オ〜！」

「きゃ〜」

「あ、待てこら！」

ニヤニヤしながらリオが発した言葉に、ますます頬を紅潮させるユースケ。

逃げ出すリオを追い掛け、図書室で騒ぐユースケ達。呆れた様に首を振るコロナと、教えてる途中でユースケが放り出した事に唇を尖らせるヴィヴィオ。そしてオロオロしている真紅をよそに、一人の少女がユースケに足払いをかける。

「うっ！？」

「……図書室ではお静かに」

本を数冊抱えたアインハルトがそう呟き、リオとユースケはそくさと元の席に戻った。

そしてノートを広げた真紅に気付いたアインハルトは、真紅の方に近付く。

「……真紅さんも、入学されてたんですか」

「あ、はい。よろしくお願いします!」

真紅が学校に居た事に少し驚いたアインハルト。アインハルトに声をかけられた真紅は、嬉しそうに立ち上がって頭を下げた。

「……図書室では、お静かに」

「あ、すみません……」

注意した途端にしょぼんと座り込む真紅に、アインハルトは慌てて訂正する。

「あ、でもそんなに落ち込まないで下さい。少し言いすぎましたし……」

「いや、そんな事……」

「いやいや……」

「いやいや……」

へこへこと頭を下げ合う真紅とアインハルト。キリがないと判断したアインハルトが、途中で話を逸らした。

「あ、あの、真紅さん？ お勉強中だったのでは……？」

「ああ！」

周りを見渡すと、既にヴィヴィオ達はそこから居なくなっていた。良く見ると、アインハルトの背後、真紅の正面にある小さな本棚の影に隠れ、「ファイト！」と書かれた札を持っていた。

「み、皆あゝ……」

「……問3の1番……間違ってます」

「えっ？」

置いてかれた事に少ししょぼくしながら真紅が呟くと、ノートを見ていたアインハルトがポツリと漏らした。

そして本を邪魔にならない所に置き、座っている真紅の後ろから手を伸ばし、真紅の右手を上からそつと握る。

「~~~~っ!？」

「この問題は……？　どうかされましたか？」

右手に掛かる少しひんやりとした細い手。左耳に掛かる息と髪の毛。そして甘い香りが鼻腔をくすぐり、真紅の頬は一瞬で茹蛸の様に赤くなる。

アインハルトも自分がしている事に気付き、真紅と同じぐらい顔を真っ赤にして離れる。

「あ、あああああのっ、す、すみませんっ……」

「い、いえっ！　ぼ、僕の方こそ、せっかくアインハルトさんが教えてくれたのに、変な事考えちゃって……」

「いえいえ……」

「いえいえ……」

再び頭を下げ合う二人。

それを遠くで見守っていたヴィヴィオ達は、約一名を除いて微笑ましく見ていた。

「なんだかあの二人、似た者同士だね」

「全くだな」

「いやはや、微笑ましいですなあ」

「……」

ヴィヴィオの意見にユースケが同意し、リオはうんうん頷いている。コロナだけは無表情で二人を見ていたが。

そこで、ふと疑問に思ったりリオがそれを口にした。

「ところでさ、何であたしらこんな事してんの？」

「ママが言ってたんだ。最近の男の子……特にライダーになる子は鈍感な子が多いから、周りですっかりムードを作ってあげるんだよ、って」

「へえ」

「そおゝかあゝ？」

ヴィヴィオの説明に納得するリオと、首を傾げるユースケ。そんなユースケを見ながら、ヴィヴィオは呆れたように呟いた。

「自覚してないからタチが悪いよ……」

「？　なんか言ったか？」

「なんでもな〜い」

ヴィヴィオの呟きが微かに聞こえたユースケが尋ねるが、ヴィヴィオはそう答えるだけだった。

○魔法仮面リリカルオーズ Vivid
第7話 青龍と城龍と新ライダー

――放課後

アインハルトと真紅が並んで下校する中、その後をヴィヴィオ達が着けている。時折アインハルトが気配を感じて振り返るが、その度にヴィヴィオ達はさっと隠れて誤魔化している。

そんな真紅とアインハルトの前に、一人の青年が現れる。素通りし様として青年の横を通り過ぎた真紅とアインハルトだが、すれ違い様に青年が呟いた。

「仮面ライダーキバ……、紅真紅だな」

「っ！」

それを聞いた途端、表情を変えて青年に構える真紅。アインハルトも警戒し、カバンを近くの電柱に立てかける。

「あなたは……？」

「ま、名前言うよりこっちの方が覚えやすいだろ」

そう言って穴が3つ付いた円盤を腰に当て、それがベルトになる。メダルを3枚セットし、円盤をまわす。

「変身……」

「ペンギン・シロクマ・オットセイ！ ギョーロギョーロギョーロツ
！」

上から薄い水色のペンギンを模した頭、胴体は真っ白いクマを模した太い腕、脚は白銀のオットセイを思わせる脚の戦士に変身した。

「仮面ライダー……ツクヨミ」

「ツクヨミ？」

「神話に登場する、月の化身とされる神の一人です」

「霸王の末裔か……。丁度良い、お前の命も貰おう」

戦士はそう名乗り、言葉の意味をアインハルトが説明する。刹那、ツクヨミの奥からユースケが走り出す。

「真紅！」

「ユースケ君！？」

なぜユースケが居るのか聞きたくなったが、まずはアインハルトを下がらせ、真紅は腕を上げる。

「キバット！」

『っしゃあ！ キバって、祭りだあ〜！ ガブッ！』

真紅の腰にキバツクルが巻かれ、ユースケもアークルを出して右手を顔の右側までゆっくりスライドさせる。

「「変身っ！！」」

ツクヨミを挟む様にして、真紅はキバに、ユースケはクウガに変身した。

各々の構えを取り、二人はツクヨミに向かっていった。

――別の場所

「パンツとパンチは、紙一重」

エイジはそう歌いながら、買い物袋を提げて歩いていた。するとその正面に、灰色のガゼルを模した頭、黒と白のパンダを模した腕、

茶色のカンガル―を模した脚をした戦士が立ちはだかった。

「君は……？」

「仮面ライダーアマテラス。よろしく」

そう挨拶し、アマテラスはゴリラアームにも似た太い腕を握って構える。

エイジは買い物袋を降ろし、ドライバーを腰に付ける。

「来い、プトティラ！」

どこかから紫のメダルがエイジの手に集い、エイジはそれをドライバーにセットする。そしてスキヤナーを振り上げ、勢い良く滑らせる。

「変身っ！」

【プテラ・トリケラ・ティラノ！ プットオティラーノザウルス！】

プトティラコンボに変身したエイジは、静かにアマテラスに向かって構えた。

「フン！」

「ぐっ……！」

鋭い鍵爪の付いた太い腕で殴りつけられ、クウガは勢い良く吹き飛ばされる。入れ替わる様にキバが突進し、鋭い蹴りを放つ。

「はっ！」

だがツクヨミはそれを片腕で受け止め、キバの腹部を蹴り飛ばす。

「かはっ……！」

キバは肺の空気が全て出された様に呻いて、クウガの下まで吹き飛ばされる。

「どうする……。つつか、接近戦はこっちが不利だよな……」

「うん……」

二人がそう話していると、怯えているスト・ヒルデ学園の生徒が蹲っていた。その子に近付き、クウガはその子の何かを取る。

「悪い、バット借りるぞ！」

「ふえっ？」

学園の子が驚くのも無視し、クウガの姿が青くなる。同時に、バットが細身の棍棒に変化する。

「はっ！」

クウガは、『仮面ライダークウガ・ドラゴンフォーム』にフォームチェンジした。

手に持った『ドラゴンロッド』を握り締め、ツクヨミに突進する。

「っ！」

シロクマアームとロッドがぶつかり合い、眩しい火花が散る。クウガは一度ぶつかるやとすぐに距離を取り、再びぶつかる。

ヒットアンドアウェイを繰り返していると、動きを読んだツクヨ

ミがロッドを避けて懷に拳を叩き込む。

「ぐあああああ！」

防御の薄いドラゴンフォームは、マイティフォームより大きく吹き飛ぶ。

「ユースケ君！」

『ちっ！ こうなったらダメ元で呼んでみるか……』

キバットは一つのフェッスルを吹き鳴らす。

『キャッスルドラーン！』

音色が響き渡り、キバの真上に穴が空く。

「まさか……！」

『キター！』

城を背中に背負った龍が出現し、鋭い咆哮を上げる。
キバットは続けて別のフェッスルを吹き鳴らす。

『ガルル、セイバー！』

キャッスルドランの口から光に包まれた像が吐き出され、キバはそれを左手でキャッチする。像が剣の形になり、左肩を中心にキバの色が青くなる。

黄色い眼も青くなり、キバはガルルセイバーを構えてオオカミの様に構える。

「ぐるるるうゝ……」

「なるほど……。鈍重な奴にゃあちよこまかとして訳か？」

いつの間にかキバの横に立ったクウガがそう言い、互いに武器を構えて走り出す。

「「だあああああああああああああああああああああ
あー！ー」」

二人が猛スピードで両サイドから攻撃する。

「くっ……」

それを食らい、膝を突くツクヨミ。

何を思ったか、頭に手を当ててどこかに念話を飛ばす。

（おい沙良！ 今は一端引くぞ！）

（勇樹！？ いや、私まだ何もしてないよ！？）

（いいから！）

（はーい）

念話の相手であるアマテラスは、大地を強く踏みつけてどこかに飛び去る。

「あれっ？」

オーズが驚くのと同時とき、ツクヨミも大地を強く殴りつけ砂埃を巻き上げる。

キバがそれに突っ込むが、既にツクヨミは居なかった。

「逃げやがったか……」

二人は変身を解き、ユースケはバットを少年に返した。異空間に消えていくキャッスルドランを見送りながら、真紅はアインハルト達に微笑んだ。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ×1

ティラノ
×
1

第7話 青龍と城龍と新ライダー（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

なのは

「皆どうだった？」

リオ

「花丸評価頂きました〜！」

ヴィヴィオ

「四人揃って！」

コロナ

「優等生です！」

真紅

「ですっ！」

ユースケ

「何で俺だけ追試なんだよおおおおおおおおお！！！」

次回、【序曲「異世界旅行でメゾフォルテ」
お楽しみに！

第8話 序曲f異世界旅行でメソフォルテ（前書き）

ユースケがぶっ壊れてますwww

第8話 序曲 f 異世界旅行でメソフォルテ

魔法仮面リリカルオーズ Vivid！ 前回の三つの出来事！

一つ！ 近くに迫ったテストに備え勉強するヴィヴィオ達。真紅はアインハルトとイチャイチャしてコロナにヤキモチやかれてヴィヴィオは鈍感なユースケにむすつとしてリア充爆発しろ！

二つ！ 下校中の真紅達に仮面ライダーツクヨミ、買い物中のエイジに仮面ライダーアマテラスが立ちはだかる。

そして三つ！ クウガはドラゴンフォームに、キバはなぜかやって来たキャッスルドランのおかげでガルルフォームに変身し、ツクヨミを撃退した……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1
サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

――高町家

そこにヴィヴィオ達仲良し五人組が集まっていた。リオ、ヴィヴィオ、真紅、コロナの順でなのはとフェイトの前に座っている。

「皆、テストの結果どうだった？」

フェイトの言葉に、四人が一斉に評価用紙を見せる。

「花丸評価頂きましたっ！」

「四人揃って！」

「優等生ですっ！」

「で、ですっ！」

リオ、ヴィヴィオ、コロナ、真紅の順でそう元気よく言う。

全員が5教科全て80点以上を獲得していた。学校に入学したての真紅も大した結果である。

それを見て、なのはとフェイトがほつと胸を撫で下ろす。エイジとキバットが皆の前に紅茶を置き、キバットとメダガブリューが四人を褒める。

【おうおう皆、良く頑張ったじゃねえか！ 可愛いしスポーツできるし頭良いし、最高じゃねえか！】

『真紅も偉いぞ〜！』

「えへへ……。ありがとキバット、メダガブリューさん」

メダガブリューが主に女子三人を褒めちぎると、三人とも照れ臭そうに頬を染める。キバットも真紅の頭を撫で、真紅はくすぐったそうに微笑む。

そしてフェイトは、隅っこの方で黒いオーラを出しているユースケを見る。そして悟る。

——あ、ダメだったのか……と。

「ユースケはどうだったの？」

「エイジiiiiiiiiiiiiiiiiiiii
イツー!!」

フェイトがユースケを励まそうとしたのも束の間、エイジがユースケに向かって爆弾を放り投げる。

フェイトは叫びながらエイジを見るが、当の本人はのほほんとした笑みを浮かべている。

女子三人はエイジを見て、ヴィヴィオの言葉……もといなのはが言っていた言葉が正しいと分かる。

——ライダーは皆鈍感……。うん、その通りだ！

「……だよ……」

「ん？」

「何で俺だけ追試なんだよおおおおおおおおおおおお
おおおおお!!」

涙を流しながら天井に向かって叫ぶユースケ。

その手には、5教科全てが30点以下の評価が書かれた評価用紙が握られていた……。

○魔法仮面リリカルオーズ Vivid
第8話 序曲 f 異世界旅行でメゾフォルテ

明日から楽しい夏休み！ 皆でわいわい合宿だ！
まさに夏だ！ 海だ！ 青春だ！ 皆で青春を、謳歌しようぜえ
ええええええええええい！

「そう思っていた時期が僕にもありました」

「ハラオウン、試験中に喋るな。0点にすんぞ」

「……」

St・ヒルズ学園にて、ユースケは一人机に向かってテスト問題と格闘していた。

だがその指はあまり動いておらず、脳内では後悔と妄想がグルグル回っているだけだった。

夏の、海の、青春への思いのみが彼の脳みそを支配していた。無論、現在進行形で。

（今頃皆、アインハルトや師匠、スバルさんやティアナさんも誘って楽しんでるんだろうなあ……）

彼は窓の外を見つめ、脳内の妄想に浸かり始めた……。

青い空、白い砂浜、澄んだ海。
浮き輪を小脇に抱えた、水着姿の金髪美少女。高町ヴィヴィオが
自分に向かって水をかけてくる。

「や、止めるよヴィヴィオ〜！」

と言いつつも嬉しそうに水を返すユースケ。ヴィヴィオも口では
嫌がりながら、楽しそうに水を食らう。
やがて疲れたのか、ユースケにしなだれかかるヴィヴィオ。ユースケはヴィヴィオの肩を掴み、互いに見詰め合う。

「ヴィヴィオ……」

「ユースケ……」

そして徐々に二人の唇が近付いていき……、が、途中でヴィヴィオがユースケを突き飛ばす。

「私バカな人って嫌い」

「ガーン！」

そう言ってヴィヴィオはユースケに背を向け去っていく。
ユースケはその背中に手を伸ばし、意識が引き戻されていった。

ユースケは意識を引き戻し、答案用紙を見る。白紙だ。正式には、名前しか書かれていない。

「先生、後何分ですか？」

「5分」

その言葉を聞くや否や、ユースケは一度目を閉じ、深く息を吐く。そしてかつと目を見開き、答案用紙を向き合った。

「夏だ！」

「海だ！」

【合宿だあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！】

エイジ、キバット、メダガブリューがそう空に向かって叫ぶ。

「パパ……」

「しっ。見ちゃダメよ」

ヴィヴィオが残念な人を見る目でエイジを見ている。するとなのはがヴィヴィオの両目を隠し、みんなを引き連れて唯一の住民の家を目指す。

エイジも慌ててそれを追いかける。そして家の奥から、同じ紫のロングヘアの少女と女性が出迎える。

「いらっしや〜い！」

『おじゃましま〜す！』

少女、『ルーテシア』アルピーノの言葉に、全員が明るく返す。ルーテシアはヴィヴィオ、コロナと再会を喜び合った後、リオと真紅の方を見る。

「リオもモニターで見るより可愛いね！」

「ほんと〜？」

ルーテシアに頭を撫でられ、リオが上機嫌のネコの様に笑顔を見せる。そしてルーテシアは真紅を下から上に舐める様に眺める。

「おっ持ち帰り〜!」

「うええええ!?!」

突然のルーテシアによる抱擁に、真紅は顔を真っ赤にして慌てふためく。アインハルトとコロナがそれを見て、むっとした表情になったのは誰も知らない。

すると、赤毛の青少年と、桃色の髪の少女がやって来る。

「エリオ、キャロちゃん!」

二人を見て、エイジが嬉しそうに叫ぶ。

『エリオ〓モンディアル』、『キャロ〓ル〓ルシエ』の二人が合流した。

「わ〜お! エリオまた背伸びてる〜!」

「ほんとね〜」

「そ、そうですか?」

「ううゝ！ 私も伸びてるんですよゝ！ …… 1・5センチ」

空色の髪の女性、『スバル』ナカジマ』がエリオの脇腹を突きながら褒める。ティアナがそれに同調すると、エリオは頬を染めて頭を掻く。キャロが涙目になって訴えると、エイジがキャロの頭を撫でる。

「大丈夫だよ。キャロちゃんはそのままの方が可愛いから」

「エイジさん……！」

エイジが笑顔で言うと、キャロの表情がどんどん明るくなっていく。

だがその瞬間、エイジは背後からの殺気に背筋を震わせた。壊れたロボットの様な動きで振り向くと、とても良い笑顔でなぜかレイジングハートを構えているのはが居た。

「な、なの……は……？」

「ンフゝンゝ エゝイゝジゝ ちょゝ……っと一緒に遊ぼうかゝ……？」

拒否する間も無く、エイジはなのはに引き摺られていった。数秒後、エイジの断末魔が聞えたとか聞えなかったとか……。

「あの夫婦は相変わらずね」

「お恥かしい限りです……」

ルーテシアの母、『メガーヌ』アルピーノ』がそう呟くと、ヴィオが顔を赤くして目を伏せる。

すると全員の下に、黒い甲冑に身を包んだ虫と人の中間の様な生命体が近付いてきた。

それを見て、アインハルトと真紅が素早く構える。

「ガリユー！ 来たの？ お馬鹿な遅刻者君」

ルーテシアが黒い生命体、『ガリユー』に近づく間に、ヴィヴィオがガリユーの説明をする。それを聞き、アインハルトと真紅はガリユーに頭を下げる。

「「ご、ごめんなさいっ！」「」

「いっていいって。気にすんな」

「あんたじゃない！」

アインハルトと真紅が頭を下げると、ひょっこりと現れたユースケが偉そうに応える。それに素早くリオがツツコミを入れる。
まあそんな訳で、何とか全員が合流したのだった。

「アंक、お前最近喋ってないけど何してんの？」

「さあなあ……」

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ×1

ティラノ×1

第8話 序曲f異世界旅行でメソフォルテ（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

ユースケ

「も！」

リオ

「ぎ！」

ヴィヴィオ

「せ！」

コロナ

「ん！」

アインハルト・真紅

「……はっ！？」「

次回、【模擬戦】

お楽しみに！

何だこの予告……？

第9話 模擬戦

魔法仮面リリカルオーズ Vivid！ ここまでのハイライト！
『J・S・事件』から4年後、『マリアージュ事件』から1年後
……。仮面ライダーオーズとしてちよいちよい戦い続ける青年、『
高町エイジ』。そして確かに消滅したが、”欲望”により復活した
『アंक』。

『高町なのは』と結婚し、娘の『高町ヴィヴィオ』とも良好な関係
を築き上げていた。

一方その頃ミッドの上空では、巨大な城を背負った龍、『キャツ
スルドラン』から一人の少年と小さなコウモリが落下した……。

そして『フェイトⅡⅡⅡハラウン』が2年前に保護した少年、
『ユースケⅡⅡⅡハラウン』は、ヴィヴィオ達と共に学校に通い
穏やかな日々を過ごしていた。

そんなある日、ユースケ達は地面に突き刺さった人間の様な物を
発見！

同時にヤミーとファンガイアが現れ、エイジはアंकと共に現場
に急いだ。

エイジは『仮面ライダーオーズ』に変身し、二体を相手に戦闘を
開始。その最中、少年『紅真紅』と『キバットバット？世』が現れ、
真紅は『仮面ライダーキバ』へと変身。

戦闘終了後に倒れた真紅を運び、エイジは魔法の訓練をしていた。

目が覚めた真紅はヴィヴィオと軽く会話し、そしてファンガイア
の気配を察知して飛び出す。

ヴィヴィオはあっさりと真紅を受け入れ、じゃれ付く。

その頃ユースケは単身ゆりかご跡地に潜入。

そこで駆けつけたエイジが見たものは、『仮面ライダークウガ・グロージングフォーム』に変身したユースケだった！

ストライクアーツを学んだ真紅と、霸王・イングヴァルトこと『アインハルト・ストラトス』と遭遇したエイジ。

そして現れた謎の戦士達、『仮面ライダーツクヨミ』と『仮面ライダーアマテラス』の二人！

果たして、彼等の正体は……！？

その後アルピーノ一家の暮らす無人世界に向かったエイジ達一行！遅れてやって来たユースケも加わり、その瞳は何を見る……？

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1
ライオン×1
シャチ×1
サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

——カルナージ

「あたし一番^{いっさいばん}！！」

「あ、リオずるゝい！」

「そうだそうだ！ 一番乗りは俺だあああああああ！！！」

水着に着替えたリオ、ヴィヴィオ、ユースケが海に向かって走る。それに続く様に同じく水着のコロナ、ルーテシア、真紅が続く。ノーヴェとアインハルトも来ているが、アインハルトは上にパーカーを羽織い、どこか恥かしそうに内股を擦り合わせている。

「アインハルトさんも……行きましょう?」

もじもじとして動かないアインハルトに、真紅が手を伸ばす。

「は、はい……」

アインハルトはさらに顔を赤らめて上着を脱ぎ、水着姿で真紅の手を取る。

ここで補足しておきたい。

幼少期からキャッスルドランの中で育ち、外の世界を見る事も無く、特に興味は無かった真紅。当然の事ながら、異性と接する事も無かった。良くてキバットの叔母、キバーラと母親が限界である。

そんな真紅が異性に手を握られ、肌を多く露出した水着姿、ほんのりと染まった美しい頬を直視したらどうなるか。

お分かりいただけたであろうか?

「……ふしゅ」

耳と頭から煙を出し、顔を真っ赤にしてオーバーヒートした。

「し、真紅さん!?!」

前に倒れる真紅を、慌ててアインハルトが抱き止める。当然の事ながらそうになると、アインハルトの胸に真紅の顔がうずまる。そして水着。その柔らかい感触がじかに伝わってくるのだ。

「あう、あう……」

真紅はすぐに復活し、勢い良くアインハルトから離れる。それを見たアインハルトは、少し眉を下げる。

「すみません……。嫌ですよ、私なんか抱かれるの……」

「へっ！？ あ、いや、そういう訳ではなくて！ えと、その……、むしろ嬉しいって言うか……」

真紅に嫌われたと誤解したのか、どんどんしょんぼりしていくアインハルト。対する真紅も顔を真っ赤にしたまま慌てて弁解する。互いに頭を下げ合う姿を見ながら、呆れたノーヴェが声をかける。

「お前等、結婚するかこっち来るかどっちかにしてくれ……」

「私的には前者がお勧めかな？」

そんなノーヴェの言葉に、ルーテシアが補足する。

それを聞いた真紅とアインハルトは、互いに耳まで赤くなってノーヴェ達の所に走っていった。

なぜか手を繋ぎながら……。

○魔法仮面リリカルオーズVivid

第9話 模擬戦

——同じ頃

「ゴールっ！」

軽く走り込みをしていたエイジ達。ジャージ姿のエイジ、なのは、スバルが順にゴールする。

「ん〜！ 良い汗掻いた〜！」

「いっつも冷や汗ばっかりだったからね……」

「誰のせいかな？」

スバルが体をほぐしながらそう漏らす。エイジはそれを聞き、頬をポリポリと掻く。それを見たなのは、目を細めてエイジを見る。エイジはあはは〜と苦笑いしながら、他の皆がゴールするのを待つ。

「皆遅いなあ〜……」

「体鈍ってるんじゃないでしょうか……？」

エイジの呟きに、スバルが付け足す。

・ ・ ・ ・

数分後、ようやくゴールしたフェイト達と共に昼食を用意し、総勢十六人で昼食を取った。

その後真紅とアインハルトが食器洗いをする為残っていた。

「……………」

「……………」

先程の事もあってか、気まずい沈黙が二人に重くのしかかる。

「「あ、あのっ!」」

口を開くと、二人揃って同じ事を言った。
再び、思い沈黙が流れる。

「し、真紅さんからどうぞ……………」

「いえいえ、レディーファーストとか言いますし……………」

そしてまた譲り合いが始まる。
互いに何度も譲り合った結果、アインハルトが先に口を開く。

「あのっ、先程はすみませんでした！勝手に抱き締めた上に誤解までしてしまつて……」

「あ、いえ……。その、僕の方こそすみません。あんな事で気絶しちゃつて……。綺麗だったんですけどね……」

「ひにやつ！？」

真紅が言つた綺麗という単語に、アインハルトが可愛らしい声を上げて顔を赤らめる。それに気付いた真紅は、アインハルトの様子を見て首を傾げる。

「どうしたんですか？」

「い、いえ……。し、真紅さんは、何を言おうとしたんですきゃ！？」

慌てて話を逸らそうとするアインハルト。最後嚙んでしまったのは黙っておく真紅だった。

「えっと……。ちょっと、僕の生まれとかについて話そうかなつて……」

「真紅さんの？」

真紅はどこか遠い目をしながら、食器を洗いつつ口を開く。その言葉に首を傾げるアインハルト。真紅はそれに頷き、再び口を開く。

「僕、純粋な人間じゃないんです。人間とファンガイアのハーフ……、その人と人間の間に生まれた、微妙に人間じゃなくて微妙にファンガイアなんです」

突然の告白に、アインハルトは食器を洗う手を止めて呆然と聞き入る。

真紅は薄く笑みを浮かべ、再び話し始める。

「まあ、基本何事も無いんですけど……。ちょっとキバの力を使いこなせないだけで。ただ……、それでもファンガイアの血が暴走する可能性もあるんです。極まれに、人間のライフエナジーが欲しくてたまらなくなる……」

自分の右手を見つめ、そう続ける真紅。その表情には、どこか影が見え隠れしていた。それを見たアインハルトは、真紅がどこか遠い所に行ってしまう錯覚を覚える。

「……ごめんなさい、いきなりこんな話して……。怖いですよ、すぐに横に居るのが怪物だったら」

……」

「そんな事っ！」

「良いんです。僕はずっと一人で居るべきですから……」

自嘲気味に笑みを漏らす真紅。アインハルトは居ても立ってもいられず、真紅の手を両手で優しく包む。驚いて自分の方を向く真紅の顔を、しっかりと正面から見つめる。

「真紅さんは怪物でもなければ、一人ぼっちでもありません。私が……ずっとずっとお傍に居ます」

真紅はその言葉に、顔を赤くするより先にただただ驚いていた。呆然とする真紅を、アインハルトが優しく抱きしめる。

「寂しかったら、いつでも言ってお下さい。もし嫌でなければ……いつでもこうして一緒に居ますから……」

「あ、あの、えっと……ありがとうございます……」

抱き締めるアインハルトの背中に手を回し、真紅はようやく顔を真っ赤にして呟いた。

その後抱き合っている姿をユースケとリオに見られ、気の済むまでからかわれたとか。

――その夜

その天然温泉大浴場に、なのは、フェイト、エイジ、エリオ、メ
ガーヌを除いた面々が集まっていた。

無論、ユースケと真紅もだ。真紅は最後まで抵抗したのだが、最
終的にルーテシアに命令されたアインハルトが耳元で囁き、ぼつき
りと折れた。

そして現在、ユースケは鼻の下を伸ばし、真紅は目を必死に逸ら
している。

キャロ以外のチビツ子組みは滝湯に行き、ガリユーに出された水
を飲みながら湯に浸かった。

するとアインハルトが、隅っこで蹲っている真紅に近づく。

「真紅さん？」

「は、ひゃいつ！」

背後から名前を呼ばれ、思わず素っ頓狂な声を漏らす真紅。
アインハルトはそんな真紅の背中に寄りかかる様にして座る。す
べすべとした背中の感触が伝わり、真紅は一瞬でのぼせかけた。

「たまには、こういうのも良いですね……」

「そ、そうですね……」

その頃チビツ子組に興味の無いユースケは、密かに大人組の方に潜り込んでいた。

湯に浸かったままキャロに近付いたとき、何かがキャロの尻を撫でた。

「きゃっ！」

「おわっ！？」

突然こちらを向いたキャロに驚き、思わずユースケは大きな声を出して立ち上がる。

「ユ、ユースケ君！？」

「ち、違います！　今、別の何かが……」

キャロに詰め寄られ、じりじりとティアナの方に下がる。ユースケがティアナの後ろに回った瞬間、再び何かがティアナの尻に触れる。

「ひゃんっ！」

「ティアナも立ち上がり、ユースケが睨まれる。

「いや、だから俺じゃ無いですって!」

必死に弁解するユースケ。

そこに騒ぎを聞きつけたヴィヴィオ達がやって来る。

「どーしたの?」

「わ、バカ! お前等来るな!」

慌ててユースケがヴィヴィオ達を戻そうと手を伸ばす。その延長線上にヴィヴィオとコロナが来た途端、またも何かがヴィヴィオとコロナの胸に触れる。

「わわっ!?!」

「きゃっ!?!」

ヴィヴィオとコロナの次の言葉を待たず、ユースケは慌てて逃げ出す。

ルーテシア、スバル、ノーヴェの後ろを回った途端、またも何か

が三人の尻を撫でる。

「あっ！？」

「うわわっ！？」

「うわ！？」

三人の声を聞いた後、ユースケはとうとう壁に追い込まれてしまった。

そこに体を触られた面々が目尻に涙を浮かべたりしながら詰め寄る。

「ユースケエ……！！」

ヴィヴィオがドスの利いた声でユースケに詰め寄る。
そんな中、騒ぎを耳にしたアインハルトと真紅も来ていた。

「なにが……？」

「っ！ 危ない！」

真紅が思いつき飛び出して何かがアインハルトに触れるのを防ぐ。

「あ、危なかったあゝ……ん？」

すると真紅の手に、何か柔らかいものが握られていた。手に力を入れると、アインハルトの口から色っぽい声が漏れる。

恐る恐る手の先を見ると、当然の事ながら真紅がアインハルトのそれを握っていた。

「うわわわわわわわわわあー！」

真紅が顔を真っ赤にし慌てて離れる。

一方触られたアインハルトは、恥かしそうに、されどどこか嬉しそうに湯に浸かっていた。

そして残ったリオの胸を、何かが思いつきり揉む。

「がおー！」

その瞬間、バリアジャケットを身に纏ったリオが何かの腕を掴み、強烈な蹴りを叩き込む。

「絶招炎雷砲！」

その技を食らい、何かが勢い良く星になっていった。

・ ・ ・ ・

結局、犯人は元ナンバーズの『セイン』であった。IS『デイベイバー』を無駄に活用し、女性陣のそれをタッチしてきたのだ。

「セインはまずリオちゃんに謝らないとね」

「いや、まず俺にでしょ」

女性陣総出でタコ殴りにされたユースケが謝罪を求める。

「ああ、ごめんな、巻き込んだじゃって……」

「ホントっスよ……。あ、そうだ！」

すると何かを思いついたユースケが、セインに耳打ちする。

「あの潜った技、俺にも教えてくれれば許しますよ」

「フン！」

その声が聞こえたヴィヴィオが、高速でユースケの顎を打ち抜く。ユースケは回転しながら宙を舞い、見事に浴槽に落下した。

――次の朝

すっかり元気を取り戻した面々が、模擬戦の為にチームに分かれて立っていた。

「あれ？ 俺達のチーム一人多いよね？」

なのは側であるエイジがそれを指摘する。フェイト側に比べ、確かに一人多い。

「それじゃ、俺の出番だな」

突然エイジの右腕が怪人化し、エイジから離れる。そしてどこか

からかセルメダルを吸収し、久々に人間形態、アंक＝ヒノの姿を取る。

「ええええええええええええ！？」

エイジが思わず声を荒げる。

それを気にせず、アंकはフェイト側に着く。

「それじゃあ皆行くよ！ せーのっ！」

『セー——ット・アー————————っ！』

「——変身っ！——」

「プテラ・トリケラ・ティラノ！ プットオティラーノザウルス——」

魔道師組は総勢十二人、ライダー組は四人、合計十六人の声とオズドライバーの音が響き渡る。

アंकは怪人体になり、感覚を確かめる様に手を握っては開く。

なのははティアナと、

エリオはフェイトと、

ルーテシアはキャロと、

スバルはノーヴェと、

ヴィヴィオはアインハルトと、

リオはコロナと、
クウガはキバと、
オーズはアングの対角線上にそれぞれ並び立つ。

そしてメガーヌの合図と共に、模擬戦がスタートした……！

オーズの使えるメダル

タカ×1（アング）
クジャク×1
コンドル×1
ライオン×1
シャチ×1
サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

第9話 模擬戦（後書き）

クウガ

「行くぜ真紅！」

キバ

「良いよ！」

アंक

「お前とこうしてやり合うのは、いつぶりだろうっなあ」

オーズ

「さあね。けど、手加減はしないよ！」

メダガブリュー

【おうとも！】

次回、【試合とライバルと交える拳】
お楽しみに！

おまけ

エイジ

「エリオ、久々にはいパンツ」

エリオ

「ありがとうございますっ！」

エイジ

「うおっ、どうしたの？ 涙なんか流して……」

エリオ

「実は……、フェイトさんが、白いブリーフ以外勝っちゃダメって言うて……。僕、エイジさんがくれたのしかトランク스가無いので……。」

ホントにありがとうございます！」

エイジ

「あ、うん……」

さて、最近リリカルオーストライカーSとVividを二つ一緒に纏めようかなあと考えたり……。

けど書き始めたのを消して完結した方に載せて連載再開というのも何だか……。

どちらが良い！という方が居ましたらコメント下さい。

それでは、次回もお楽しみに！

第10話 試合とライバルと交える拳

魔法仮面リリカルオーズVivid！ 前回の三つの出来事！

一つ！ 補修を終えたユースケは、何とか皆に合流！

二つ！ アインハルトと二人きりになった真紅は、アインハルトに自身の秘密を告白。それを受け入れたアインハルトと、また一歩進展する！

そして三つ！ 『セイン温泉進入事件』濡れ衣のユースケ』の後、人間形態になったアंकも含めて、全員での模擬戦が始まった……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1
シャチ×1
サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

——カルナージ

——side ユースケ

「うおおおおおおおおおおおおおお
おお!!」

俺の真上では、『スバル』ナカジマさんと俺の師匠、『ノーヴ
エ』ナカジマ』が激しくぶつかり合う。
……うむ、90点ってところか。

「でえええりやあああああああああああああああ!

「！」

「はっ！」

勢い良く突進する『エリオ』モンディアル』さん……は置いといて、それに正面からぶつかるフェイトさんだ。

……うむ、777点ってどこか。

「うーん……ヴィヴィオはアインハルトと戦ってるから……」

「あわわわ、ま、まずは何を……！？」

発育の良い胸の下で腕を組んで考える『ルーテシア』アルピーノ』さんと、あたふたしている『キャロ』ル』ルシエ』さん。

キャロさんはあれとして……ル』ル』さんは65点ってどこかな。

「くっ！」

「はっ！」

凛々しい表情で魔力弾を連射する『ティアナ』ランスター』さんと、それを迎え撃つなのはさん。

なのはさんは点数つけたらぶっ殺されるから……やっぱティアさんは85点だな。

そして……。

「はああああああああああああああ！！！」

ぶつかり合う大人モードのヴィヴィオとアインハルト。

大人モードなだけあって、目に優しい。向こうで大人モードのリオとゴーレムに乗ったコロナが戦ってるが、まあいつらは小さいし。

ヴィヴィオとアインハルトは…… 98点だな。

「あのさあ、ユースケ君……」

おう、どうした真紅こと仮面ライダーキバ。

俺は今この極上の光景を目に焼き付けている最中なんだ。

「いや、さっきから何見てるの？」

「知りたいか！」

「ごめん、やっぱり良いや」

質問してきた真紅に返したが、真紅はフェッスルを取り出して冷静に答えた。

「っておい！ それウェイク、アップの奴じゃねえか！ お前俺の事マッハで殺す気か！？」

「まあ良いから見てみる。パラダイスだぞ？」

真紅をこつちまで寄せ、ベストな角度からパラダイスを見せる。

「まずあのスバルさんと師匠だ。二人ともあの大きさであの動きだ。当然、男なら魅入るだろ？」

隣の真紅に聞くと、全身真っ赤にして目を伏せていた。
「ったく、だから女々しいんだよお前は。」

「失礼な！　っていうか、全身真っ赤なのはユースケ君もだよな？」

「あ、そっか」

それもそうだな。

まあ良い。視点を戻す。

「だがほら、あのフェイトさん……ちょ、エリオさん邪魔！　……
ほら、フェイトさんのあのスタイルであの服だぞ？」

「あう……」

さすがにフェイトさんの破壊力はやばいのか、真紅も目を逸らしてはチラチラフェイトさんを見ている。

なのはさんは怒られるから止めとくとして……。

「ほら、あの凛々しいティアさん、キャラさん……は良いや。そして胸元の開いたルールーさん！ 堪らんذار？」

「ううゝ……」

さすがにルールーさんの衣装は刺激が強かったのか、沸騰しそうなまでに真っ赤になっている真紅。

ふっ、作戦成功！

「隙あ……ってえ！」

真紅に蹴りをかまそうとしたが、俺の頭に何かが直撃する。
この痛み……アクセルシューターか！

「ってえなヴィヴィオ！ 何すんだよ！」

「ふん！」

上のヴィヴィオに文句を言ったら、頬を膨らませてそっぽを向か

れた。

「ううゝ……いたっ！」

未だに真っ赤になっている真紅にも、アインハルトが放った何か
が直撃する。

「ア、アインハルトさん……？」

「……真紅さんがそんなエッチな人だとは思いませんでした」

真紅はアインハルトを見上げるが、アインハルトは微かに怒った
様子で真紅から顔を背ける。

あゝあ、こりゃ嫌われたかな……？

「そ、そんな……。僕は……」

「ど、どうしても我慢できないなら！ わ、私に言ってくれれば……
……によ……によ……」

……おいまで。までおい。
今アインハルトは何と仰った？ あの霸王っ子は？
私に言ってくれれば、だと……？

「……見損なっただぜ真紅」

「えっ!？」

「俺とお前は、闘う事でしか分かり合えない!」

「えええゝ!？」

驚いてる真紅を他所に、俺は真紅に殴り掛かった。
説明なんて悠長な事を言ってる場合ではない!
もう、止まれんのだ……!

何言ってんだろ俺……。

— side ユースケ end

○魔法仮面リリカルオーズvivid

第10話 試合とライバルと交える拳

その頃ユースケ達の観察対象にならなかったこの二人はと言うと……。

「こうしてお前と戦うなんて、何年ぶりだっけ？」

「一年前に殴り合ったのをもう忘れたか！ おめでたい奴だな……」

「褒め言葉として受け取っておくよ！」

軽く言葉を交わしながら空中で何度もぶつかり合うオーズとアンク。

オーズはメダガブリューを握っているが、握った方とは逆の手でアンクを殴り付ける。アンクもそれに対抗し、火球を放たず炎の手に纏って殴るという戦い方を取っている。

【おいエイジ、いい加減俺にも暴れさせろよ】

「え？ うゝん……しょうがない、行くよ！ メダガブリュー！」

【おうよ！】

メダガブリューの上顎がバックンバックン動き、エイジはその欲望を叶える為アンクに向かってメダガブリューを振り下ろす。

アンクの左肩に生えた羽をかすめ、がら空きになった背中にアンクの火球が直撃する。落下するオーズは寸前で軌道を変え、突っ込んでくるアンクを強靱な尻尾で大地に叩きつける。

濛々と土煙が舞い上がり、その隙にオーズは上空に戻る。そこで停滞し呼吸を整えていると、土煙を破って巨大な火球が飛んでくる。オーズは後頭部に生えた翼でそれを打ち返し、自分と同じ高さまで上がってきたアンクを見る。

「良かった。アンクも、腕鈍ってないんだ」

「はっ！ 元々腕一本だからなあ。鈍ってたまるか！」

オーズの言葉に、アंकは冗談交じりに答える。

そうして互いに次の攻撃の準備をしていると、オーズの耳にルーテシアの声が聞こえる。

「青組の皆さん！ 予定よりちょっと早いですが、作戦発動します
！」

「「「「「了解っ！」「」「」」」」」

ルーテシアの合図と、他の青組メンバーの返事が聞える。

きょんとするアंकを放っておき、オーズはキバ、クウガの下へ降下する。

「あ、までエイジ！」

アंकも追い掛けるが、オーズが咄嗟に放った『フリーレンフェッセルン』に捕らえられる。

オーズはクウガの隣に立ち、メダジャリバーを渡す。クウガは姿が変わり、銀に紫のラインが入った、それでいて強靱な鎧を纏ったフォーム、『タイタンフォーム』に変わる。

「一気に決めちゃおう！」

「はい！ エイジさん！」

オーズの言葉に、クウガが明るく答える。

キバはすぐに紫色の拳の様なフェッスルをキバットに吹かせる。

『ドッガ、ハンマー！』

紫色の像を握り、それが巨大なハンマーとなる。

そして両肩と胸の鎧が強靱になる。『仮面ライダーキバ・ドッガフォーム』である。

紫の戦士三人が対峙する中、それぞれの後ろから桜色と橙色の極太な光線が発射される。

「……へっ！？」「」

『おいおいおい、こりややべーんじゃねえの！？』

【あいしんくそーとうー！】

なのはとティアナの放った集束砲ブレイカーに動物的恐怖を抱くライダー三人。

オーズは咄嗟に翼を展開し、空に逃げる。

「ちょ、エイジさん！ 置いてかないで下さいよー！」

「だってそのフォーム見るからに重そうじゃん！ 無理無理！」

「そんな事……っ！」

オーズの言葉にクウガが反論しようとした瞬間、クウガとキバが光線の中に消えた。

光線が止むと、変身を解除してのびているユースケと真紅がいた。オーズはうわ～、とか言いながら地上を見渡す。何とか残っていたヴィヴィオとアインハルトの戦いも終わり、戦場が一気に静かになる。

「ありや～……。でもこれで青組の勝ちかな……？」

「どこに目え付けてんだ？」

勝利を確信したオーズの背後から、自由になったアंकが声をかける。

オーズはアंकに向き合い、薄く笑ってオースキャナーを滑らせる。

【スキヤニングチャージ！】

いつもと違い右脚に氷の刃が纏われる。アंकも右脚に炎を纏い、オーズを迎え撃つ。

「セイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアア！」

そうしてオーズとアングのキックがぶつかり合い、すさまじい衝撃波が周囲を包み込んだ。

ホテルアルピーノ

大きなベッドの上で、ヴィヴィオやユースケ達子供組がぐったりと倒れていた。

「あーっ……」

「う、動けない……」

全身筋肉痛になったのか、ベッドからピクリとも動けないユース

ケ達。

二つのベッドがくっ付いたタイプのベッドだが、左のベッドにはアインハルトと真紅、右のベッドにはユースケ、ヴィヴィオ、リオ、コロナが転がっているその傍で、ルーテシアがクリスを持って座っている。

「限界超えて張り切るからだよ？」

笑いながらそう言うと、ルーテシアの目に面白い光景が見えた。アインハルトと同じベッドで転がっている為顔を真っ赤にしている真紅と、真紅と同じベッドで転がっている為顔を真っ赤にしているアインハルトだ。

そんな二人を見て、ルーテシアは悪戯っぽく笑みを浮かべる。

「それにしても、やっぱり真紅は可愛いねえ」

そう言って真紅の横に座り、状態を起こす。まだ動く事のできない真紅を、優しくその胸に抱き締める。

「わぶっ……！」

突然の抱擁に驚くが、力が入らず抵抗できない真紅。アインハルトも頬を膨らませて引き離そうとするが、体が言う事を利かず動く事ができない。

ルーテシアは一旦真紅を放し、真紅と自身の額を合わせる。すぐ傍にルーテシアの顔があり、甘い息が鼻腔をくすぐる。というより、その指先が真紅の首筋を優しく撫でるくすぐる。

惚けた表情の真紅と、酷く楽しそうな笑みを浮かべるルーテシアの唇が近付いていく。

だがその瞬間、アインハルトが脚で真紅の胴体を挟み、ベッドに引き倒す。

「あっ……」

「……し、真紅さんの唇は渡しません！」

「ア、アインハルトさん！？」

アインハルトの大胆発言に、顔を真っ赤にする真紅。
ルーテシアは満足した表情を浮かべ、再び真紅に顔を近づける。

「それじゃ、唇じゃなければいいんだね」

「へっ？」「」

そう言つて、真紅の右頬にキスをするルーテシア。そして満足そうに笑みを浮かべ、おもむろにモニターを開く。

真紅は頭から煙を出し、アインハルトに固め技を食らって動けずにいる。

「そういえば、アインハルトってこういうの興味ある?」

「はい?」

突然声をかけられ、真紅の首を太ももではさみながら、アインハルトがゆっくり身を起こす。

「ディスガサマツビモイション
D S A A、公式魔法戦協議会!」

試合の様子がモニターに映る。思わずアインハルトは固め技を解放し、真紅とユースケも食い入るように見ている。

「出場可能年齢、10歳から19歳」

「インターミドル・チャンピオンシップだ!」

ルーテシアが言った後、ユースケが嬉しそうに叫ぶ。
ルーテシアとヴィヴィオ、コロナが説明をした後、ルーテシアは別の画面を見せる。

「真紅とユースケは、こんなのどうかな?」

モニターの奥では、様々な会社が作ったライダー同士が戦っていた。

「その名も、マスクドライダーバトルーナメント仮面舞踏会！」

おおまかなルールは一緒だが、様は魔道師か仮面ライダーかの違いだ。

「おお！」

「凄い……」

すっかりのめり込んだユースケと真紅。

ヴィヴィオ、リオ、コロナ、アインハルトはインターミドル・チャンピオンシップに。

ユースケと真紅は仮面舞踏会への闘志を燃やし、一同はぐっすりと眠った。

真紅はアインハルトに抱かれながら……。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ×1

ティラノ×1

第10話 試合とライバルと交える拳（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

アマテラス

「いったあゝい……」

エイジ

「あれ……？」

なのは

「何で……、何でも言ってくれないの!？」

ヴィヴィオ

「ママ……」

次回、【ウィズユー＜あなたの笑顔に＞
お楽しみに！

エイジ

「言ったよね。なのは俺が守るって」

第11話 ウイズユー<あなたの笑顔に（前書き）

挿入歌

『POWER to TEARER』

ED

『あなたの笑顔に』

第11話 ウィズユー<あなたの笑顔に

魔法仮面リリカルオーズ Vivid！ ここまでのハイライト！
『J・S・事件』から4年後、『マリアージュ事件』から1年後
……。仮面ライダーオーズとしてちよいちよい戦い続ける青年、『
高町エイジ』。そして確かに消滅したが、”欲望”により復活した
『アंक』。

『高町なのは』と結婚し、娘の『高町ヴィヴィオ』とも良好な関係
を築き上げていた。

一方その頃ミッドの上空では、巨大な城を背負った龍、『キャツ
スルドラン』から一人の少年と小さなコウモリが落下した……。

そして『フェイトⅡⅡハラオウン』が2年前に保護した少年、
『ユースケⅡAⅡハラオウン』は、『ヴィヴィオ達と共に学校に通い
穏やかな日々を過ごしていた。

そんなある日、ユースケ達は地面に突き刺さった人間の様な物を
発見！

同時にヤミーとファンガイアが現れ、エイジはアंकと共に現場
に急いだ。

エイジは『仮面ライダーオーズ』に変身し、二体を相手に戦闘を
開始。その最中、少年『紅真紅』と『キバットバット？世』が現れ、
真紅は『仮面ライダーキバ』へと変身。

戦闘終了後に倒れた真紅を運び、エイジは魔法の訓練をしていた。

目が覚めた真紅はヴィヴィオと軽く会話し、そしてファンガイア
の気配を察知して飛び出す。

ヴィヴィオはあっさりと真紅を受け入れ、じゃれ付く。

その頃ユースケは单身ゆりかご跡地に潜入。

そこで駆けつけたエイジが見たものは、『仮面ライダークウガ・グロージングフォーム』に変身したユースケだった！

ストライクアーツを学んだ真紅と、霸王・イングヴァルトこと『アインハルト・ストラトス』と遭遇したエイジ。

そして現れた謎の戦士達、『仮面ライダーツクヨミ』と『仮面ライダーアマテラス』の二人！

果たして、彼等の正体は……！？

その後アルピーノ一家の暮らす無人世界に向かったエイジ達一行！補修から合流したユースケが濡れ衣を着せられたり、真紅とアインハルトの関係が進展したり、夜はまだまだ長かった……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オースの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）
クジャク×1
コンドル×1
ライオン×1
シャチ×1
サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

——ホテルアルピーノ

真紅達が中でニャンニャンしてる頃、エイジは一人外に出ていた。取り出したプテラメダルを、月明かりに照らして眺める。

「お前とも、大分長い付き合いになるな……」

機動六課に入隊し、なのはと和解した直後の出会いだった。その後エイジの体内にひっそりと潜み、その先駆けとしてメダガブリューが出現。そして六課全滅の際に覚醒し、プトティラコンボへと変身した。

そして暴走の危険性を伴いながらも、幾多の激闘を潜り抜けてきた。特にマリアージュ事件のときはお世話になっていた記憶がある。

「……あれ？ ヴィヴィオは聖王の血を受け継いで、でオーズは聖王で、ヴィヴィオの中にもこのメダルが入って……。もしかして、ヴィヴィオもオーズになれちゃう？」

とつぷり思い出に浸かっていると、エイジの中で変な疑問が浮かび上がる。

そしてドライバーを腰に付けて変身するヴィヴィオを想像し、軽く噴出してしまう。

そんなエイジの近くに、眩く金色に輝く仮面ライダーが現れる。頭から順に、ジャツカル、キツネ、オオカミを模している様に見える。背中に背負った剣を除けば、ラトラーターを眩くした感じだろうか。

『仮面ライダーアマテラス・ジャツキオオコンボ』

「君は……？」

「あれ？ 自己紹介しなかったけ？ 仮面ライダーアマテラスだよ！」

「ああ……！ で、そんなアマテラスが何の用？」

「いや、貴方のメダルが欲しいなあ……って」

「ごめん、それは無理」

「まあ、そうだよね」

エイジの質問から始まり、淡々と会話を続けるエイジとアマテラス。意外と気が合うのだろうか。

その後もなぜか他愛も無い話で盛り上がるエイジとアマテラス。

「で、最終的には目玉焼きにはしようゆだよね、って話に落ち着いたんだ」

「あ、分かる分かる！ やっぱりしようゆだよね……ってえ！ そうじゃなくて！ 貴方のメ・ダル！」

「あ、忘れてた……」

目玉焼きトークの最中、アマテラスが用件を思い出して話を止める。

エイジものんきに返事し、ドライバーを腰にセットする。そしてブトティラのメダルをセットし、スキヤナーを勢い良く滑らせる。

「変身っ！」

【プテラ・トリケラ・ティラノ！ プットオティラーノザウルース！】

エイジの周囲に紫色のエネルギー体が出現し、それがエイジの身に付くと同時に変身が完了する。

『仮面ライダーオーズ・プトティラコンボ』に変身したエイジは、アマテラスと対峙した。

——St・ヒルズ学園

夕日が傾いてきた頃、紫色の仮面ライダーがそこにやって来た。頭から順にフクロウ、コウモリ、ミミズクを模している様に見える。左腕には、タジャスピナーに酷似した道具も付いている。

『仮面ライダーツクヨミ・フクコウズコンボ』だ。

「ふははははは！ 仮面ライダーツクヨミ様のご登場だ！ 霸王の末裔とキバの鎧を継いだ奴！ 大人しく出てきやがれ！」

ツクヨミは無駄に後ろを爆発させながら登場し、でかい声でそう叫ぶ。

が、誰一人としてツクヨミの相手をしない。

「ちょ、おい……」

ツクヨミが寂しそうにしていると、職員の女性がツクヨミに声をかける。

「今夏休みだから生徒は居ませんよ。後、帰る前に爆発させた所、直してって下さいね」

「あ、はい。すみません」

ツクヨミは頭を掻きながらツクヨミは職員に謝り、スコップを借りて爆発させた穴を埋め始めた。

せつせと働く最中、ツクヨミは空に向かって叫んだ。

「ッてうおおおおおおおおおい！！ 何で俺こんな事やってんの！？ っていうかアマテラスどこ行きやがった！ あいつ俺一人放置してどつかバカンスにでも行きやがったか！？ つぎけんなどちくしょおおおおおおお！！」

「いいから早く穴直して下さい」

「あ、はい……」

叫んで先生に怒られる仮面ライダー。中々シユールな光景である。こうして、ツクヨミは日が沈むまでせつせと働いたのであった……。

○魔法仮面リリカルオーズ Vivid
第11話 ウィズユー<あなたの笑顔に

——ホテルアルピーノ

オーズの振るうメダガブリューが空気を切り裂く。アマテラスは高速で動いてそれを避け、背後から十字剣『キツネソード』をオーズの背中に振る。

オーズは右の踵でキツネソードの側面を蹴り、彼方に飛ばす。がら空きになったアマテラスの胸に、平手打ちを当てる。

そのとき、オーズの右手に柔らかな感触が当たる。

「ふぁんっ！」

「へっ!？」

オーズが手に力を入れると、アマテラスが変な声を漏らす。

そのままアマテラスとオーズはバランスを崩し、変身を解除ながら倒れ込む。

それは奇しくも、エイジが金髪の美少女を押し倒す様な形になってしまった。アマテラスに変身していたと思われる美少女は、エイジの顔が近い事に顔を真っ赤にする。

「えっと……」

「あわわわわ……」

思考が停止するエイジと、おどおどして目を逸らす美少女。

その時、エイジの背後で何かが地面に当たる音がした。エイジは身を起こし、その隙に美少女はどこかに走り去ってしまう。エイジはその背中を見ながらも、ふと背後に振り返る。

「なの……は……?」

その視線の先には、お盆とコップを大地に散乱させ、怒りと衝撃の入り交じった様な表情をしたなのはが立っていた。

・ ・ ・ ・

数分が経過し、エイジとなのはは先程と変わらない距離で立っている。エイジは何か言おうと何度も口を開くが、重い空気に圧倒されて声が出ない。

それを破るかのように、なのはが口を開く。

「……さっきの子、誰……？」

「それは……」

なのはは表情を変えず、重々しく声を発する。エイジは何を思ったか、歯切れの悪い答え方をする。

「なんでエイジはあの子を押し倒してたの……？」

「えっと……」

「……なんで……なんで何も言ってくれないの!？」

さらに質問するのはだが、今だに歯切れの悪いエイジに、ついにエイジの肩を掴むのは。

その目には、涙が溜まっている。

「私は……っ！ エイジがつ、どこか遠くに行っちゃったり、誰かに盗られたりしたらって思うと……もう、どうにかなっちゃいそう
で……！」

エイジの両肩を掴み、涙を零しながら怒鳴るのは。そこには、いつもの優しい母親としての表情は無い。そこには、エイジ「ヒノ」という男性を愛する、一人の女性としてのなのはの姿があった。

「それなのにエイジは！ 私の心配も無視して、どこかにふらつと行っちゃって……色んな戦いに巻き込まれて……どうして？ 私はこんなに、エイジと一緒に居たいのに……なんで……？」

今まで胸の奥に溜めていたものを撒き散らすかのように怒鳴るのは。ついに堪え切れなくなったのか、下を向いて涙を落とす。エイジはそんななのはに、優しく微笑む。

「なのは……ありがとう……」

その言葉に、なのはは勢い良く顔を上げる。

「なんで……？ 何でそこで『ごめん』じゃなくて、弁解でもなく

て『ありがとう』なの！？ 何でそんな……私に距離を置くの？」

「俺は……、なのはが大好きだから。俺の戦いに、なのはを巻き込みたくない……」

「それでもっ！ 私はエイジの傍に居たい！ 強くて図太いくせに脆いエイジを、支えたいって思ってる……。だから結婚したのに……これじゃあ……」

「……そっか。ごめんね。俺が嫌になったら、いつでも言っ。それでも俺は、なのはが大好きだけどね……」

「っ！ バカっ！」

ようやく口を開いたエイジは、なのなに距離を置くかのように答える。

そんなエイジに、なのはは何度も怒鳴り続ける。そしてエイジが最後に呟いた言葉に、なのははついにエイジに抱き付く。

その行動は予想外だったのか、エイジはオロオロしてしまう。

「な、なのは！？」

「……卑怯者」

「え、ええっ！？」

「エイジは卑怯だよ……。そうやっていつも、私の惚れた弱みに付け込んで……。卑怯者。ロリコン。キス下手」

「そこまで言う……?」

なのはエイジの胸に顔を埋めながら、どこか拗ねた様子でエイジの心にグサグサと突き刺さる様な事を連呼する。

エイジが若干落ち込んだとき、なのは顔を上げてエイジの唇に自分のそれを重ねる。

しばらく水っぽい音が聞こえ、やがてなのはが嬉しそうに唇を離す。

「ほら、やっぱりキス下手じゃん!」

「……すみません」

唇を軽く叩きながら妖艶な笑みで言うのはに、エイジは顔を赤くしながらそっぽを向く。

珍しく赤くなるエイジが以外だったのか、なのは楽しそうにエイジの頬を突く。

「にやはは、もしかして照れちゃってるのかなあ?」

「うっ……」

からかう様に言うのはに、エイジは詰まった様な声を上げる。
そんな二人の背後に、銀色のオオカミを模したヤミーが出現する。

エイジはなのはとヤミーの間に立つ。

「エイジ……」

「前に言っただよね……。なのはは俺が守るって」

エイジはメダルを入れたままのドライバーを傾け、一気にスキヤナーを振り上げる。するとなのはが後ろからエイジの右手に手を添える。

「なのは？」

「たまには一緒に……ね？」

「……分かった」

なのはがスキヤナーを振り下ろすのに合わせ、エイジは左腕を顔の右側に振り上げる。

「「変身っ！」」

【プテラ・トリケラ・ティラノ！ プットオティラーノザウルース！】

エイジは再びオーズに変身し、大地に手を突き刺してメダガブリ
ューを取り出す。

高速でオーズに突進してきたヤミーに、カウンターの要領でメダガブリューを突き出す。

自らの勢いも相まって、セルメダルを大量に噴出しながら吹き飛ばす。ぶオオカミヤミ。

オーズはメダガブリューにセルメダルを入れ、ガブリューに食わせる。

【ゴックン！ プットオティラーノヒッターズ！】

「セイアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！！」

バズーカモードになったメダガブリューから、『ストレインドウ
ーム』が放たれ、ヤミーに炸裂する。

ヤミーは断末魔を上げる間も無く、爆発してセルメダルの山となる。

オーズは変身を解き、抱きついてきたのはを優しく受け止めた。

そんなエイジとなのはを、物陰から見ている影が幾つか。

「はあ、若いって良いわね」

「はっ！ 完全に年食ったババアの発言だなあ」

「……アंकちゃん、何か言ったかしら？」

「……いや、何でもない」

メガー又のため息交じりの発言に、鋭く言い放つアंक。メガー又はそんなアंकに、冷酷かつ重く言葉を発する。アंकは寒気を感じ、何事も無かったかのように黙った。

「いいなあ、私もいつかエリオ君と……」

「キャ、キャロ！？」

「へえ、エリオもやるじゃない」

頬に手を当てながらそう言うキャロに、顔を真っ赤にするエリオ。そしてそれをからかうティアナ。

「うーん、あたしもずっとエイジさんと居たら、ああやって心開いてもらえたのかな……？ 何か距離置かれてる気がしたから諦めたんだけど……」

「重苦しいからそういう事言っな」

少し後悔交じりに呟くスバルに、呆れた様に返すノーヴェ。

そしてすっかり外は暗くなったが、エイジとなのはの夜はまだまだ長い……。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ
×
1
テイラノ
×
1

第11話 ウィズユー<あなたの笑顔に（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

アインハルト

「私の、デバイス……？」

ルーテシア

「はやてさんをお願いしようか」

はやて

「ども〜！」

？

「異世界キター！ …… ってヴィータ！ 俺の肉取るんじゃないよ
！」

？

「主、居候の身で贅沢言わないで下さい……」

次回、【魔導具】

お楽しみに！

第12話 魔導具（前書き）

宣伝

魔法仮面オーズ×フォーゼ NOVEL大戦GIGA MIX！
というのを投降してあります。オーズ編はオーズStS Xとこの
オーズVividの間の話となりますので、お時間のある方は読んで
みて下さい。

第12話 魔導具

魔法仮面リリカルオーズVivid！ 前回の三つの出来事！

一つ！ アマテラスと遭遇したエイジは、プトティラコンボでそれを迎え撃つ！

二つ！ ツクヨミがミッドチルダでバカやってる隙に、なのはがエイジに溜まっていた不満をぶつける！

そして三つ！ エイジとなのはは和解し、エイジはオオカミヤミ―を数秒で撃破した……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

——ホテルアルピーノ

ルーテシアが端末を開く後ろ、アインハルトと真紅は緊張した面持ちでソファーに座っていた。

というのも、インターミドルに参加するには、安全面を考慮してCLASS3以上のデバイスを所持し、装備する必要があった。だが、世の中そうそう真正古代ベルカ^{エンシャント}のデバイスを作れる者など居ない。

そこでルーテシアの提案により、彼女の古い親友の保護者兼、エイジ達の友人である『八神はやて』に協力してもらう事となった。

なお、真紅が居るのは現在真紅がアインハルトに頭上がない状態だからである。

「管理局の魔導騎士、八神はやて司令……。いったいどんな方なのでしょう……？」

「きっとドツガみたいな人なんでしょうね……。色んな事件を解決した、歴戦の勇士って噂ですし……」

アインハルトが緊張した様子で真紅に尋ねると、真紅も怯えた様に返す。

そして二人の脳裏に、管理局の服を着たごついおばさんが浮かぶ。さらに身震いしていると、モニターの奥に赤毛の少女が映る。

『あー、ルールーオーツス！』

「おいーすアギト！」

『デバイスの件だね？　ちよつとまってて〜』

「うん、お願い」

アギトと呼ばれた少女が奥へ行き、少しして画面の下からぬつとタヌキのお面をつけた何者かが現れる。

「「ひゃっ！？」」

思わず可愛らしい声を上げて飛び上がるアインハルトと真紅。そんな二人を見てくすりと笑った後、ルーテシアは画面に向き直った。

『はあーいルールー♪　お久しぶりやー』

「八神司令、お久しぶりです」

タヌキのお面を取って、ヘアピンを付けた可愛らしい女性が映る。この女性こそ、先程から話していた八神はやてその人だった。その顔を見て、真紅とアインハルトは勢い良く土下座した。

「「ご、ごめんなさいっ！」」

「？」

「？ どないしたん？」

そんな二人を見ながら、はやてとルーテシアはきょとんと首を傾げていた。

その頃モニターの奥からは、聞き覚えの無い声がしていた。

「あつ、おいヴィータ！ てめえ俺が狙ってた肉取るんじゃないよ
！」

「へんつ！ バーベキューは戦！ 気い抜いてつとあつとゆうーまに
殺されんぞ！」

「戦場じゃねえし！ お前には思いやりの心つてもんがねえのか！
？」

『おめーこそ！ 居候らしく遠慮してもんはねえのかよ！』

何やら橙に近い赤毛の少女と、リーゼントヘアーの青年が肉を取り合って揉めている様だ。

少女の方の名は『ヴィータ』。リーゼントの方の名は『十六夜ゲント』というらしい。

と言うのも、二人とも肉の焼き目を利用して各々の名前を付けているからだ。二人が額を擦り合わせて唸っていると、ピンクの髪をポニーテールにした凜々しい女性と、小さな子狐が口を開いた。

『こらヴィータ、主が通信中だぞ。声を抑えろ』

『ちえっ……』

『主も、みつともないですよ。居候なんですから少しは遠慮して下さい……』

『止めるなルナ！ 俺は肉の恨みを晴らしてやらなきゃいけないんだ……！』

ポニーテールの女性、『シグナム』の言う事も、子狐『ルナ』の言う事も聞かず再び唸るゲントとヴィータ。

金髪の女性、『シャマル』と、銀髪の少女、『リイン』がその間でオロオロと動き回っている。

そして二人が掴みかかろうとした瞬間、一家の主が声を上げた。

『二人とも、ちょお静かにしよか？』

『だってこいつが『ええな？』はいつ！』

振り向いたはやての、どこか動物的恐怖を覚える笑みに、思わず姿勢を正して返事するгентとヴィータ。

そして互いに気持ち悪いぐらい譲り合い、食卓が静かになったそう。

すると青いオオカミ、『ザフィーラ』がルナに餌の入った器を勧める。

『お前も苦労しているな……』

『もう慣れました……』

こいつとなら美味しい酒が飲めそうだ。
そう直感したザフィーラであった……。

○魔法仮面リリカルオーズVivid
第12話 魔導具

その後は楽しかった四日間のオフトレツアーも終わり、エイジ達一行はミッドチルダへと帰った。
その次元航空にて……。

「んじゃまあ、基礎メニュー送るからデバイス出せ」

ノーヴェがジェットエッジを取り出し、ヴィヴィオ達のデバイスにメニューを送る。

「コロナはゴーレム召喚と操作の精度向上。リオは春光拳と炎雷魔法の徹底強化。武器戦闘もやっていくぞ。ヴィヴィオは格闘戦技全体のスキルアップとカウンターブローの秘密特訓。でアインハルトは……」

ノーヴェはヴィヴィオ達一人一人の目を見ながらメニューを伝え

る。その一つ一つに、ヴィヴィオ達も元気良く返事する。
そしてノーヴェはアインハルトを見つめ、こう続ける。

「あたしが変に口を出して霸王流のスタイルを崩してもなんだ。代わり公式試合経験のあるスパ―相手を山ほど探してきてやろう。お前は戦いの中で必要なものを見つけて掴む。それが一番かと思うんだが……どうだ？」

霸王流はアインハルトにしかその特性、弱点は分からない。そこでノーヴェは、アインハルト自身に霸王流に何が足りないか、どこを伸ばすべきかを考えさせる事にした。

その事に気付いたアインハルトは、勢い良く頭を下げる。

「あ、ありがとうございますっ！」

「おう。んでお前等は……」

アインハルトに笑みを返した後、ノーヴェはユースケと真紅を見る。二人とも仮面舞踏会に参加する為、やはり特訓の必要があった。

「つつつても、あたしも手いっぱいだし……。つか、ライダーの事はライダーに教わるのが一番だろ」

その言葉に、全員の目が一齐にエイジの方を向く。なぜか人間体

のままであるアंकも含め。

するとエイジは視線に気付き、ユースケと真紅に笑みを返す。

「オツケー。でも俺だけじゃ練習がワンパターンになっちゃうから、助っ人コーチを呼んであるよ」

「「助っ人？」」

エイジもそうなる事は分かっていたらしく、既に別のコーチを呼んでおいたそうだ。

そしてユースケと真紅が首を傾げていると、前が黒、後ろが緑のバイクが止まる。そのバイクから、二人の青年が降りてきた。

「悪い、待たせたなエイジ」

「ティアナ！ 久しぶりだね」

「フィ、フィリップ！？」

黒いソフト帽を被った青年と、髪の毛の左側をクリップで止めた青年だ。

ティアナは嬉しさと驚きの混ざった表情で、クリップの青年を見つめる。その横では、スバルがニヤニヤと彼女を見ている。

「お願いします、ショーさん、フィリップさん」

『ショールレフト』と『フィリップライト』。『仮面ライダーダブル』に変身する二人組だ。

「後もう一人……」

エイジがそう呟くと、銀色のバイクが到着する。操縦者はヘルメットを外し、どこか人懐っこそうな笑みを浮かべた男性が駆け寄ってくる。

「ごめんごめん、遅くなっちゃって」

「いえいえ。ありがとうございます、翔一さん」

『八神翔一』。八神はやての従兄にして、『仮面ライダーアギト』に変身する男性だ。

「ユースケは、俺みたいな武器を奪えない相手との戦い方を。真紅は翔一さんみたいな戦い方が自在に代わる相手との戦い方を特訓していこうと思う」

「あの、エイジさん……」

エイジが説明を終えると、真紅がおずおずと手を上げる。

「ショーさんとフィリップさんの相手は……?」

「ああ、はやてちゃんに頼まれた子がそろそろ来ると思っただけど……」

エイジがそう言つて周囲を見回す。

すると天井が破壊され、エイジ達の方へ向かつて何かが落下する。

「うわあああああああゝ!？」

轟音と共に煙が舞い上がり、それぞれ手でそれを払う。

そしてクレーターから白い戦士が頭を抜き、その場に座り込む。

真紅は、なぜだかその様子に親近感を覚えていた。

「君? はやてちゃんとこの居候つて?」

「あ、ういっす!」

白い戦士はベルトにある四つのスイッチを一気にオフにし、変身を解除する。

そのリーゼント頭を見て、真紅とアインハルトはモニターの奥に居た青年を浮かべる。

「「あつ……」」

「仮面ライダーフォーゼこと十六夜гент！ 全世界の仮面ライダー全員とダチになる男だ！」

そうビシッと決め、仮面舞踏会初参加組、『チーム・オーズ』のメンバーが出揃った。

仮面舞踏会まで、後二ヶ月！

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン	×	1
シャチ	×	1
サイ	×	1
クワガタ	×	1
プテラ	×	1
トリケラ	×	1
ティラノ	×	1

第12話 魔導具（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

гент

「異世界キター！」

真紅

「キバット！」

ユースケ

「超変身っ！」

エイジ

「若いつて良いね〜」

なのは

「エイジ……老けすぎなの……」

次回、【青・春・特・訓】

お楽しみに！

第13話 青・春・特・訓（前書き）

今回から新章突入！

なので今回はほぼキャラ説明会です。

だけど……？

第13話 青・春・特・訓

魔法仮面リリカルオーズ Vivid！ ここまでのハイライト！
『J・S・事件』から4年後、『マリアージュ事件』から1年後
……。仮面ライダーオーズとしてちよいちよい戦い続ける青年、『
高町エイジ』。そして確かに消滅したが、”欲望”により復活した
『アंक』。

『高町なのは』と結婚し、娘の『高町ヴィヴィオ』とも良好な関係
を築き上げていた。

一方その頃ミッドの上空では、巨大な城を背負った龍、『キャツ
スルドラン』から一人の少年と小さなコウモリが落下した……。

そして『フェイトⅡⅡⅡハラウン』が2年前に保護した少年、
『ユースケⅡⅡⅡハラウン』は、『ヴィヴィオ達と共に学校に通い
穏やかな日々を過ごしていた。

そんなある日、ユースケ達は地面に突き刺さった人間の様な物を
発見！

同時にヤミーとファンガイアが現れ、エイジはアंकと共に現場
に急いだ。

エイジは『仮面ライダーオーズ』に変身し、二体を相手に戦闘を
開始。その最中、少年『紅真紅』と『キバットバット？世』が現れ、
真紅は『仮面ライダーキバ』へと変身。

戦闘終了後に倒れた真紅を運び、エイジは魔法の訓練をしていた。

目が覚めた真紅はヴィヴィオと軽く会話し、そしてファンガイア
の気配を察知して飛び出す。

ヴィヴィオはあっさりと真紅を受け入れ、じゃれ付く。

その頃ユースケは单身ゆりかご跡地に潜入。

そこで駆けつけたエイジが見たものは、『仮面ライダークウガ・グロージングフォーム』に変身したユースケだった！

ストライクアーツを学んだ真紅と、霸王・イングヴァルトこと『アインハルト・ストラトス』と遭遇したエイジ。

そして現れた謎の戦士達、『仮面ライダーツクヨミ』と『仮面ライダーアマテラス』の二人！

果たして、彼等の正体は……！？

その後アルピーノ一家の暮らす無人世界に向かったエイジ達一行！補修から合流したユースケが濡れ衣を着せられたり、真紅とアインハルトの関係が進展したり、充実した四日間も終わりを告げ、エイジ達一行はミッドチルダへと帰還する。

八神家の居候、『十六夜ゲント』とその使い魔、『ルナ』も一行に加わる。

ヴィヴィオ達はインターミドルに。

ユースケ達は仮面舞踏会に備え、それぞれの特訓が始まるうとしていた……。

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ×1

ティラノ×1

——ミッドチルダ首都・クラナガン

人気の無い廃工場で、赤いクワガタを模した様な戦士と、紫の恐竜を模した戦士がぶつかり合う。

「でりやあああああああああああああああああー!!」

雄たけびを上げて突進する赤い戦士、『仮面ライダークウガ・マ
イティフォーム』。

一方紫の戦士は、その拳を軽く受け流す。

「よつと……」

『仮面ライダーオーズ・プトティラコンボ』である。

オーズはカウンターの要領で、クウガの懐に拳を叩き込む。よろ
めいて引き下がるクウガだが、近くにあった鉄パイプを砕き、自身
の手に握る。

「超変身!」

その叫び声と同時に姿が変わり、装甲が薄く青くなった姿、『仮
面ライダークウガ・ドラゴンフォーム』に超変身する。鉄パイプは
『ドラゴンロッド』へと姿を変え、クウガは素早くオーズに突進す
る。

そこから少し離れた場所では、紅いコウモリのような顔をした戦士
と、右側が緑、左側が黒い戦士とがぶつかっている。

「はっ！ くあっ！」

短い叫び声と共に、拳と蹴りを連続で放つ紅い戦士、『仮面ライダーキバ・キバフォーム』。

二色の戦士は右首から生えた銀色のマフラーを靡かせ、その攻撃を避ける。

「甘い甘い！」

『次はこれで行こう！』

二色の戦士、『仮面ライダー^{ダブル}W・サイクロンジョーカー』から二つの声がする。二度目に聞えてきた声が発せられたとき、Wの右目が点滅する。そしてWは黄色いメモリを取り出し、緑のメモリを引き抜いてそのメモリを入れる。

【LUNA！ JOKER！】

右側が緑から黄色に変わり、Wは右腕をしなやかな鞭の様に变えてキバを攻め立てる。

さらにオーズ達とW達との間で、白いロケットの様な戦士と金色の龍の様な戦士が拳をぶつけ合う。

「ライダー根性パアアアアアアアアアアアアンチ！」

何とも言えない技名を叫びながら拳を放つ白い戦士、『仮面ライダーフォーゼ・ベースステイツ』。

ぶつけ合っていた金色の戦士は拳を引き、すぐさまフォーゼのがら空きになった懷に強烈な蹴りを叩き込む。

「はっ！」

低く短く叫ぶ金色の戦士、『仮面ライダーアギト・グランドフォーム』。

吹き飛んだフォーゼは右腰のスイッチを入れ替え、赤いスイッチをオンにする。それに合わせ、アギトはベルトの右腰を叩く。

【ファ・イ・ヤー オン】

「ふん！」

どちらも真つ赤な炎を扱う姿、『仮面ライダーフォーゼ・ファイヤーステイツ』と、『仮面ライダーアギト・フレイムフォーム』に変身した。

フォーゼは銃、『ヒーハックガン』を手にして火球を連射するが、アギトはベルトから『フレイムセイバー』を出現させ、火球を全て

切り落とす。

仮面舞踏会に備え、『チーム・オーズ』の練習の日々は続いていた。

○魔法仮面リリカルオーズVivid

第13話 青・春・特・訓

— side ユースケ

「ああ、疲れたあ……」

「僕も……」

『真紅うゝ、大丈夫か？』

俺が空を見上げながらドサツと腰を下ろすと、横では俺と同年の少年がうつ伏せに倒れる。その頭を、小さなコウモリみたいな動物が突く。

先程の『仮面ライダーキバ』こと『紅^{くれない}真紅^{しんく}』と、ベルトにくっ付いていた真紅の相棒『キバットバット？世』、通称『キバット』だ。

「うん……ありがとうキバット……」

『ユースケも平気か？』

「お、おうよ……」

真紅は明らかに大丈夫じゃない調子で返事するが、キバットは気にせず俺の名前を呼んで同じ質問をする。

この俺、『仮面ライダークウガ』こと『ユースケ^{アレクシード} A^{II}ハラオウ^ン』は、引き攣った笑みを浮かべて返事する。

俺と真紅を挟んで向こうに居るリーゼント頭の青年は、なにやらキツネ耳を生やした可愛らしい少女に水を受け取って一気に飲み干している。

「主、大丈夫ですか？」

「んぐつ……んぐつ……ぷはあ！　おう！　疲れは青春の鉛筆削り！　尖った俺はどこまでも行くぜ！」

「意味が分かりません」

心配そうにリーゼント野朗の使い魔、『ルナ』が顔を覗き込んでいる。あんな可愛い使い魔欲しいなあ……。するとリーゼントマン、『仮面ライダーフォーゼ』こと『十六夜ゲント』は勢い良く立ち上がり、訳の分からない事を叫ぶ。

「でも、俺の手からフレイムセイバーを叩き落したのはビックリだよー！」

「真紅も良い動きしてたぜ！」

「君の弱点はスタミナ不足かな……。けど、それは特訓をする内に体力が付くだろうから、後は予想外の事に驚かない精神力かな」

茶髪の穏やかな笑みを浮かべる男性に続く様に、黒いソフト帽を被った男性と、ウェーブした髪をクリップで留め、分厚い本を小脇に抱えた青年が鋭い指摘をする。

茶髪の男性は『仮面ライダーアギト』こと『八神翔一』さん。八神はやてさんの従兄で、レストランを切り盛りしている。超うめーよ！

ソフト帽の人は『仮面ライダーW・ボディサイド』こと『ショーレフト』さん。探偵もやっていて、クラナガン^{ダブル}を誰よりも愛している。ちよつと三枚目なのが欠点かな……。誰だ？　今お前もだろ

って言った人。

そしてクリップを付けた青年は『仮面ライダー^{ダブル}W・ソウルサイド』こと『フィリップ・ライト』さん。『世界の本棚^{ほし}』と呼ばれる図書館みたいなものを頭の中に持っているらしく、どこからか変な知識を持つてくる事がある謎の人。

「ありがとうございます！ ショーさん、フィリップさん！」

「ユースケは、やっぱり咄嗟の判断力と行動力が最大の武器だね。ちよつと早とちりしちゃう事もあるけど、そこはもう経験しかないからね」

そして遅れて癖毛で髪が全体的にシュツとした人が、俺にそう声をかけてくれる。

「ういっす！ エイジさん」

ヴィヴィオのお父さんにして、かの『J・S・事件』で活躍した『仮面ライダーオーズ』こと『高町エイジ』さん。無闇やたらとパンツパンツ言ってる、はたから見ればただの変な人だ。いや実際変な人だけど。

「じゃあ皆に、ご褒美のパンツを」「いりません」「ええ～！？」

言わんこつちやない。

俺達はエイジさんからのパンツを断り、疲れた体を無理に動かして帰路へと付いた。

その後ろでは、落ち込んだエイジさんを励ます翔一さんの声が聞こえた……。

——side ユースケ end

——クラナガン

гентと分かれたユースケは、真紅と共に歩いていた。
すると前方から、同じく疲れた様子のヴィヴィオとアインハルトが歩いてきた。

「あ、ユースケ！ 真紅君！」

「ヴィヴィオちゃんに、アインハルトさん！」

ヴィヴィオは二人に気付き、元気良く手を振る。すると真紅もそれに気付き、アインハルトに視線を置いて手を振る。

ヴィヴィオはユースケの、真紅はアインハルトの前まで駆け寄り、互いに話しかける。

「お疲れ様です、アインハルトさん」

「いえ、真紅さんもお疲れ様です」

どこか距離を置き、それでもどこか嬉しそうな笑みを浮かべ、真紅とアインハルトは微笑みあう。

そしてヴィヴィオは、ユースケに会うや否や、バッグからクッキーを取り出す。

「はい！ ユースケ、あ〜ん……」

悪戯っぽく微笑みながら、ヴィヴィオはユースケの口元にクッキーを押し付ける。

ユースケは一気に頬を染め、そっぽを向きながらその手を払う。

「よ、よせよ気持ち悪い……」

「あっ……」

叩かれてヴィヴィオの手から離れたクッキーは、空中で数回転した後、大地に当たって無残に砕け散る。

ユースケはしまったという顔をするが、ヴィヴィオは無表情のまま、ゆつくりとしゃがんでクッキーの破片を拾い集め、ハンカチに包む。

前髪で表情を見せない事が、余計にユースケの心を痛めた。

「あ……、ヴィヴィオ……？」

「……」

ユースケは恐る恐る声をかけるが、ヴィヴィオは返事をしない。そして無言で立ち上がり、前髪の奥でユースケを見つめる。

「……バカ」

一言だけ呟き、ヴィヴィオは逃げる様にしてユースケに背を向けて走っていった。

ユースケは手を伸ばすが、その手は何も掴まず空しくユースケの下に戻った。

「あ、ヴィヴィオさん！」

それを見ていたアインハルトは、慌ててヴィヴィオを追いつける。残った真紅は、心配そうにユースケを見ていた。そして空を見上げ、キバットに声をかける。

「キバット……」

『任せとけ!』

真紅の表情と声色だけで用件を悟り、アインハルトとヴィヴィオを追った。

——ゆりかご跡地

息を切らせて走るヴィヴィオは、近くの木に蹲る様にして顔を伏せる。表情は見えないが、鼻を吸る様な音がまれに聞こえる。するとそこに、タキシードの様な物を着た男性が近付く。

「ガッリックククク……」

不気味な笑い声を上げる男性に、ヴィヴィオは咄嗟に涙を拭いてクリスを抱く。

「あなたは……？」

「お前かあ……なのはの娘ってのあ……？」

すると男性の顔にステンドグラスの様な模様が現れ、一瞬にしてクモの様なファンガイア、『スパイダーファンガイア』に変わる。ヴィヴィオも目付きを変え、大人モードにセットアップする。その姿を見た途端、ファンガイアは指を嫌らしくくねらせる。

『やはりかあ……キョエエイツ！』

気味の悪い叫び声を上げ、ファンガイアは一瞬でヴィヴィオの懷を殴り付ける。

「がつ……」

一瞬表情を歪めたヴィヴィオだが、すぐに意識を失ってファンガイアに抱えられる。途端に子供モードに戻ってしまう。

「ヴィヴィオさん！」

駆けつけたアインハルトが、ファンガイアを見るや否や蹴りかかる。だがファンガイアは一瞬でそれを避け、アインハルトの懷に力

ウンターの要領で拳を叩き込む。

そしてアインハルトもそのまま抱え込まれ、ゆりかご跡地を去っていった。

その光景を、逆さまになって木に留まっているキバットが見ていた。

『こりや大変だ……』

自分だけでは無理だと判断したキバットは木から離れ、急いで真紅の下へ戻っていった。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン	×	1
シャチ	×	1
サイ	×	1
クワガタ	×	1
プテラ	×	1
トリケラ	×	1
ティラノ	×	1

第13話 青・春・特・訓（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

ユースケ

「ヴィヴィオを返せ……」

真紅

「ごめんなさい、アインハルトさん……」

アインハルト

「いえ……」

ファンガイア

『なのはは無理だったが、その娘は俺の物にいく』

エイジ

「少し……頭冷やそうか……」

次回、【第二楽章V恋の二部合唱】

お楽しみに！

ちなみに今回のファンガイア、若干キャラが違いますが前作にも出ています。

探してみてください（笑）

第14話 第二章V恋の二部合唱

魔法仮面リリカルオーズVivid！ 前回の三つの出来事！

一つ！ 仮面舞踏会に備え、ユースケ、真紅、ゲントはオーズ、W、アギトと特訓をしていた！

二つ！ 家に戻るユースケは、ヴィヴィオにクッキーを渡されるが照れ臭さからそれを無駄にしまい、ヴィヴィオと喧嘩してしまう！

そして三つ！ ユースケから逃げる様にしてゆりかご跡地に来たヴィヴィオと、それを追ってきたアインハルトが、スパイダーファングガイアに捕まってしまった……！

カウント・ザ・メダルズ！

現在、オーズの使えるメダルは……！！？

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1
サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

——クラナガン

俯いたユースケの背中を見ながら、真紅は何か言おうとして口を開く。だが上手く言葉が選べず、その口を閉じてしまう。
するとそこへ、慌てた様子のキバットが飛んでくる。

「キバット！」

『大変だ真紅！ アインハルトの姉ちゃんとヴィヴィオたんがフアンガイアに捕まっちゃったあ！』

「うそ！？」

真紅がキバットに声をかけると、キバットは早口にそう言った。
真紅が驚きの声を上げるのと同時に、ユースケも大きくそれに反応

する。

真紅は悔しそうに唇を噛み締める。元々人間とファンガイアのハーフ、それと人間の間に生まれた、いわゆるクォーターである。その為ファンガイアの血が薄く、ファンガイアの気配を感じる能力は父に比べ低い。その上キバの力を引き出せない為、苦戦も多い。

真紅は顔を上げ、キバットに強い口調で指示を出す。

「キバット！ 案内して！」

『おっしやあ！』

「俺も行く！」

キバットと真紅の言葉に、ユースケが食い付く。

その言葉を待っていたのか、真紅はユースケに頷く。ユースケはクッキーの破片があった場所を見つめ、キバットの後を追った。

——空き家

縛られたヴィヴィオは、薄暗い部屋で目を覚ました。

「んっ……ここは……？」

重たい瞼をこじ開け、周囲を見回す。

背後の壁には巨大なのはのポスター。自分の傍には盗撮したと思われる機動六課時代のなのはの写真。その奥には17歳ほどのなのはの写真が大量に貼られていた。

それを見ただけで、ヴィヴィオは恐怖を感じる。

「ガッリックククク……」

不気味な笑を浮かべ、スパイダーファンガイアが現れる。そしてタキシードの様な物を着た、海草の様な髪の毛の男性に変わる。

「なのはは無理だったがあゝ……その娘は俺のものだあゝつくつくつく」

「ひっ……」

嫌らしい笑みを浮かべ、男性はヴィヴィオの顎をなでる。君の悪い感触に体を震わせ、ヴィヴィオは硬く目を閉じる。

その瞼に、一人の少年が浮かんだ。

（ユースケ……！）

○魔法仮面リリカルオースVivid
第14話 第二楽章V恋の二部合唱

——空き家・前

キバットに案内され、真紅とユースケは空き家の前までやって来た。

お化け屋敷と呼んでもおかしくない様な不気味な洋館。それを前にして、真紅とユースケに何とも言えない怒りが湧いてくる。

「何か……無駄に豪華だね」

「ああ……無駄にな」

機械の様に無表情で口を動かし、真紅とユースケは言葉を交わす。そしてユースケの脳裏に、同じぐらいの大きさの家でヴィヴィオと暮らす未来予想図が浮かび上がる。

子供は二人。男の子と女の子。ヴィヴィオに似た息子と、自分に似た娘。そして子供達が寝静まってからは、ヴィヴィオと二人同じベッドで楽しく……。

「でへ……でへへへへ……」

「ユースケ君……気持ち悪い顔になってるよ……」

「おっと、いかんいかん」

ユースケは妄想の世界に入り込み、口の端から涎を垂らしながら鼻の下を伸ばす。その表情に、真紅が生暖かい目を向けてツツコミを入れる。ユースケは慌てて涎を拭き、洋館を睨む。

「そんじゃ行くか!」

「うん!」

『おうよ!』

ユースケの言葉に、真紅とキバットが元気良く返す。

そして二人と一匹は、洋館に突入した。

――洋館内

ヴィヴィオは両腕を縛られながらも、巧みに男性を避ける。
だがついに壁に追い詰められ、指をワキワキと動かした男性が近
付いてくる。

ヴィヴィオが硬く目を閉じたとき、ドアが勢い良く開けられる。

「ちょっと待ったああああ!!」

「ユースケ!」

逆光に照らされ、ユースケが姿を現す。ヴィヴィオが嬉しそうな
声をあげ、ユースケは男性に近付く。

「おいそこのお前! ヴィヴィオを放せ!」

「チュ〜リツヒヒヒヒ! 断ると言っただら?」

「だっただら!」

男性の挑発する様な言葉に、ユースケはさらに一步詰め寄る。
そして……

・ ・ ・ ・

「良いか！ 俺を縛ったらすぐにヴィヴィオを開放しろよ！」

「はいはい」

ユースケは現在、男性に縛られている。その横で腕ごと柱に括り付けられたヴィヴィオは、深いため息をつく。

ユースケを縛った男性は、ドアのところまで立って振り返る。

「じゃ！」

「おう！」

そう言つて、男性は洋館から抜け出す。

そしてしばらく経ち、我に帰ったユースケが叫ぶ。

「騙されたあああああああああ！？」

「はあ……」

ユースケの絶叫の後、ヴィヴィオの深い深いため息が響き渡った。

——別の部屋

「失礼します。アインハルトさん居ますか？」

その部屋に真紅とキバツが入ると、倒れて意識を失ったアインハルトに何かを飲ませている男性が目に入った。

「っ！ 貴様っ！」

「ちっ！」

真紅が男性に向かって走ると、男性は真紅に背を向けて走り去る。

『待て待てい！』

その男性を、キバツトが高速で追い掛ける。

真紅はアインハルトに駆け寄り、意識を失ったアインハルトを抱き起こす。

「アインハルトさん！ アインハルトさん！！」

「んっ……真紅さん……？」

真紅が呼びかけながらアインハルトの体を揺ると、ゆつくりとアインハルトが目を開ける。

すると一瞬大きく目を見開き、少しして目をうつとりと細め、頬を紅潮させる。やや呼吸が荒く、目元が潤んでいる。

「えっと、アインハルトさ……んむう！？」

不思議そうに真紅が首を傾げると、突然アインハルトが真紅の首に腕を絡め、目を閉じて真紅の唇に自分のそれを強引に重ねる。不意の事に驚き、真紅は目を見開く。そして徐々に思考が麻痺し、気付けばアインハルトを抱き返していた。

しばらく時間が経ち、我に帰った真紅がアインハルトを突き放す。

「ア、アアアインハルトさん！？ いいいいったいにやにをつ！？」

真紅はあまり回らない呂律を強引に回し、再びキスを迫るアインハルトを抑え付ける。

そして口の中に残った味を感じ、何かひらめく。

「もしかして……薬が原因ですか？」

「ふえゝ？ なゝんれゝふかゝ？」

酔っ払ったかのように惚けた表情と回らない呂律で首を傾げるアインハルト。いつもとのギャップに、思わず心拍数が上がる真紅。慌てて頭を振って煩惱を掃い、アインハルトの目を見つめる。そして右腕を引き、奥歯を噛み締める。

「アインハルトさん……ごめんなさいっ！」

そう言っただけで勢い良くアインハルトの腹部を打ち抜き、アインハルトは再び意識を失って真紅の腕に収まる。その表情を見ながら、真紅は袖でアインハルトの唇を拭く。

「……こういうのは……本当に好きな人と、お互いに了承した上でするもんですね……」

どこか寂しそうにそう呟き、真紅はアインハルトを抱えてユースケとヴィヴィオを探した。

——洋館内

ユースケとヴィヴィオはすぐ近くで縛られ、互いの顔が近いせいか、どちらの頬も赤く染まっている。

先程から二人とも何か言おうとして口を開くが、結局何も言い出せずに沈黙が続いている。

やがて、意を決した様にユースケが声を発した。

「な、なあヴィヴィオ……。さっきは、ごめんな……。お前のクツキー無駄にしちまって……」

「うっん……。元々あんまり上手にできなかったし……。それにユースケも、私のなんか食べたくないだろうし……」

「なっ！　んなわけねえだろ！」

ユースケが両足をもぞもぞと突き合わせながらヴィヴィオに謝罪すると、ヴィヴィオも内股を擦り合わせて応える。そして最後にヴィヴィオが発した、どこか切なそうな言葉に、ユースケが思わず叫ぶ。

「俺は……その……お前のだから食べたいつつつか……。真紅やアインハルトも居たし……ちょっと、照れ臭かったんだよね……悪い」

「……くすつ。ホントにユースケって、変な所で照れ屋さんだよな。可愛い」

「う、うつせえ！」

さらに顔を真っ赤にしながら、ユースケはボソボソとヴィヴィオに自分の思いを伝える。

するとヴィヴィオにからかわれ、ユースケは拗ねた様にそっぽを向いてしまう。少しからかい過ぎたかなと、ヴィヴィオは少し反省する。

ユースケはそっぽを向きながら、少し小さな声で語りかける。

「まあなんだ……その、今度また作ってくれよ……。飛びつきり上手いお菓子をさ」

「……うん」

ユースケの言葉に、頬を赤らめながらも嬉しそうにヴィヴィオが頷く。

そして真紅が来るまでの数分間。どこか甘い空気が二人の間に流れていた。

——洋館・外

キバットに追い掛けられる中、男性は洋館から出る。
するとその前方に、派手ながらの民族衣装の様な物を着た男性が
立ちはだかる。

「ひい！ お、お前は！」

「あなたですか……前にもなのはを狙って、今度はヴィヴィオを狙
ったファンガイアは……」

男性は目の前の男、『高町エイジ』に怯え、腰を抜かす。
エイジは笑顔でドライバーを巻きつけ、紫のメダルを三枚セット
する。

「少し、頭冷やそうか……」

そう呟き、オースキャナーを滑らせる。
男性はエイジに背を向け、スパイダーファンガイアに戻る。

「変身っ！」

【プテラ・トリケラ・ティラノ！ プットオティラーノザウルス
！】

オーズは無言でメダガブリューを引き抜き、メダルを一枚食わせ
てバズーカモードに変える。

【ゴックン！ プットオティラーノヒツサーツ！】

「セイヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！！」

間髪居れずにオーズの必殺技、『ストレインドウム』が炸裂し、
スパイダーファンガイアは爆発した。

オーズは変身を解き、洋館から出てくる四人を見つめていた。

——後日

「おっいユースケー！」

ヴィヴィオはユースケを公園に呼び出し、丁寧にラッピングしたクッキーを手渡す。

「はいこれ！」

「おお、サンキュー！」

ユースケは嬉しそうに礼を言い、クッキーを眺める。
ヴィヴィオは頬を染め、ユースケの顔を覗き込む。

「それと……」

そう言うや否や、ヴィヴィオはユースケの頬に唇を押し当てる。
突然の事にパニックになるユースケを見て、ヴィヴィオは悪戯っぽく微笑む。

「えへへ」この間のお礼ね！」

ヴィヴィオはユースケにそう言い残し、早足に去ってしまった。
どうやら相当恥かしかったらしい。
残ったユースケは、キスされた場所を摩りながら呟いた。

「……なんだっただ……？」

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン×1

シャチ×1

サイ×1

クワガタ×1

プテラ×1

トリケラ×1

ティラノ×1

第14話 第二章V恋の二部合唱（後書き）

次回、魔法仮面リリカルオーズ！

гент

「異世界キター！」

ヴィータ

「っせえ！」

はやて

「随分賑やかになったもんやな」

ミウラ

「僕もそう思います」

ルナ

「時が経つのは早いものですね」

次回、【初・夜・遭・遇】

お楽しみに！

番外編 メリーX／聖夜と唇と青・春・甘・味（前書き）

最近寒くなってきましたが、皆様お元気でしょうか？

私はもろに風邪をひきました。皆様も、体調管理には十分お気を
つけ下さいね。

それでは、クリスマス番外編をどうぞ。

番外編 メリーX／聖夜と唇と青・春・甘・味

魔法仮面リリカルオーズ Vivid！ 前回の三つの出来事！

一つ！ ユースケはヴィヴィオの救出に成功。キスまでされちゃつてもうけしからん！

二つ！ その裏で真紅はアインハルトの姉ちゃんを救出。だけどどっか真紅は寂しそうだぞ？

そして三つ！ 一連の事件の犯人、スパイダーファンガイアはヴィヴィオの父ちゃん、『高町エイジ』さんにセイヤーされて塵になつたんだ！

おまけ！ 事件から数日が経ち、一同は落ち着きを取り戻していたのだが……？

【あ、おいキバット！ 俺の出番取るんじゃないやねえよ！】

『まあまあ良いじゃねえかメダガブリュー。俺だつてたまにはナレーションしてえんだよ』

【……しかたねえ。後で奢れよ？】

『へいへい……』

カウント・ザ・メダルズ！
現在、オーズの使えるメダルは……！？

タカ×1（アंक）
クジャク×1
コンドル×1
ライオン×1
シャチ×1
サイ×1
クワガタ×1
プテラ×1
トリケラ×1
ティラノ×1

——高町家

なのはとエイジはせつせとクリスマスツリーを立て、リビングを華やかに飾り付ける。最初は渋々だったアंकも現在はノリノリで壁に星を模った風船をくっ付けている。

「そういえばなのは、ヴィヴィオと真紅は？」

「ん？　なんかヴィヴィオは真紅君連れて『勇者様、こちらであります！』とか言っでどっか行っちゃった」

「ふうん……」

なのはの説明に、何とも言えない表情で飾り付けを進めるエイジ。恐らく”真紅”繋がり、原作者繋がりでその様なセリフを言ったのだろう。しかし悲しかな。『紅 真紅』はそこまでアクロバティックでもなければ、男らしくもなかった。

「あ、それとエイジ。今日はヤミーが出てても変身しちゃダメだからね！」

「ええ〜!？」

なのはがそう付け足し、エイジは不満に声を上げる。

もしも本当にヤミーがグリードが出たらどうするのか。その心配は無用だった様だ。

――クラナガン

「うおおおおお!？　なんだこれ!？　どこもかしこも髭生やしたおっさんだらけになっちまったぞ!？」

紫の髪をした青年、『仮面ライダーツクヨミ』こと『ひの日野 勇樹ゆうき』が街全体を見渡して素っ頓狂な声を上げる。

その隣で長い金髪の少女、『仮面ライダーアマテラス』こと『いぬ犬 神 沙良がみ さら』が不思議そうに首を傾げる。

「だれかが髭を生やしたいって欲望を叶えたのかなあ？」

「いや、んなもん街全体で願わねえだろ……」

沙良の発言に、頬を引き攣らせながら勇樹が返す。

色も音も感じないグリードとはいえ、形そのものは認識できる。そして街のあちらこちらに居る、巨大な袋を持った髭を生やした男性達——厳密には女性も混ざっているのだが——を見て再び一歩退く。

「まさかこの髭……セルメダルか!？」

「いや、そっちの方がありえないって」

深刻な顔をしてバカな事を呟く勇樹に、沙良がさらっとツッコミを入れる。ダジャレではない。断じて。……どうやら深刻なのは勇樹の頭の様だ。

しばらくの間、クラナガンでは『髭を凝視する美男美少女カップル』という事で話題になったとか……。

○魔法仮面リリカルオースViVid
番外編 メリーX／聖夜と唇と青・春・甘・味

――レストランAGITΩ アギト

一方こちらでは、真紅とアインハルトがまるで始めてのお見合いの様に緊張した面持ちで向かい合っていた。

そこから少し離れた所で、ユースケとヴィヴィオがモニター越しに様子を見ている。ちなみに、撮影協力はバガミールである。

「あ、あああああののつ！ し、真紅さん！ ほ、本日は、おおお足元の悪い中、私の為にお、お時間を切り裂いていただき、誠に、恐縮でございまして……！」

「アインハルトさん硬いです！ っていつか今日晴れます！ しかも時間切り裂くってなんですか！」

テンパって呂律と思考回路が大変な事になっているアインハルトに、ヴィヴィオが小声で叫ぶという高度なテクニックを要してツツコミを入れる。

反対側に座る真紅は、肩を一度大きく跳ねさせてそれに対応する。

「そ、そんな節操もない……。ここ、こちらこそ時間を引き裂いていただき、誠に恐縮でござす……」

「なんかアインハルトが卑猥な事しちゃったみたいになってるから！ しかも時間引き裂くってなんだよ！ あと語尾なんとかしろ！」

同じく呂律以上に思考回路が大変な事になっている真紅に、ユースケが鋭いツツコミを入れる。

そしてヴィヴィオとユースケが肩で荒く呼吸し、水を一気に飲み干してモニターを見つめる。

「こりゃ相当手強いな……」

「うん……二人とも呂律がリミット・ブレイクされてるよ……」

「思考回路はメモリブレイクだな……」

「スキヤニ……ごめん、何も浮かばなかった」

真剣な面持ちでモニターに顔を近づけ、ヴィヴィオがレバーを入れる動きをして呟く。それに便乗し、ユースケが左手をスナップさせて呟く。続けてヴィヴィオが何か言いかけるが、特にボケが浮かばず黙り込む。

そもそもなぜこんな事になっているのか。事は数時間前に遡る……。

・ ・ ・ ・

——数時間前

ヴィヴィオはアインハルトに呼び出され、人気の無い海岸に来ていた。

「どうしたんですかアインハルトさん？ 大事なお話って……」

「実は……」

ヴィヴィオの質問に、アインハルトはもじもじと両膝を擦り合わせて口を開く。その様子だけで、ヴィヴィオは真紅絡みだと分かった。

案の定、内容は真紅とのいざこざだった。

「以前私達が誘拐されてから……どうも真紅さんと上手くいかなくて……」

「はあ……」

「わ、私、真紅さんに嫌われてしまったんでしょうか!？」

「アインハルトさん落ち着いて下さい。多分それは天地が避けてもありえないので……。というか、何か心当たりは無いんですか？」

アインハルトが続けた言葉に、ヴィヴィオは「やっぱりか」という表情で頬を掻く。対するアインハルトはまるで世界が終わるかの様な表情で、体を震わせながらヴィヴィオに泣きつく。

そんなアインハルトの背中を撫でながら、ヴィヴィオは冷静に返す。

するとアインハルトは再びヴィヴィオから離れて膝を擦り合わせる。

「う、心当たりは……。あるにはあるのですが……」

「なら原因はそれです」

頬を赤く染めるアインハルトの手を引き、ヴィヴィオはずんずん歩き出す。

慌てふためく霸王を他所に、聖王はユースケに念話を繋ぐ。

《もしもし、ユースケ？》

《はいこちらユースケ〓A〓ハラオウンでございます〓》

《アインハルトさん確保〓。そっちは？》

《同じく真紅確保だ。例の場所で落ち合おうぜ》

《了解》

二人の念話によると、どうやらユースケも真紅を確保し、アインハルトとの仲違いを解決させようとしていたようだ。

ヴィヴィオは念話を切り、クラナガンでも有名なレストランへと向かう。

空いた手にバガミールを握りながら……。

・ ・ ・ ・

——現在

そんなことがあり、今に至る。

気まずい沈黙が流れる中、店のオーナーである男性、『八神 翔一』が真紅とアインハルトの前に食事を置く。

「はい！ アギトランチ二人前、お待ちどうさまです！」

「「あ、ありがとうございます……」」

笑顔で食事を置く翔一に、真紅とアインハルトは揃って礼を言う。そして互いにスプーンを取り、アギトランチを口に運ぶ。

一口……また一口……。無表情でアギトランチを口に運ぶ二人を見て、翔一は首を傾げる。

「あれ？ どうしたの二人とも？ いつもは美味しそうに食べてくれるんだけど……もしかして、美味しくなかった……？」

「い、いえ！ すっごく美味しいです！ ただ……」

「その……私達に問題があると言いますか……」

徐々に落ち込んでいく翔一に、真紅は慌てて弁解する。続けてアインハルトが発した言葉に、翔一は目を瞬かせてテーブルの傍にしゃがみ込む。

「なになに？ なんかあったの？」

「ちょっと……気まずい状態と言いますか……」

二人の顔を交互に見ながら言う翔一に、真紅が俯きながら言葉を発する。翔一がアインハルトの方を見ると、同様に俯いている。

ユースケとヴィヴィオは、思わぬ乱入者に驚きを隠せない。だが放っておこう。

「気まずい状態ねえ……。でもそれって、お互いにお互いが大切だって事じゃないの？」

「「えっ……？」」

「だって、二人とも相手を傷つけちゃうのが怖いから何も言わないんじゃないの？」

「「あっ……」」

しばらく考えた後、翔一は真顔で二人の本心を突く。翔一が続けた補足に、真紅とアインハルトははっとなって顔を上げる。

確かに、何か言葉を交わせば、何かの拍子に今の関係が崩れてしまう。それを恐れていた部分が二人にはあった。

顔を上げた二人は、お互いの瞳をじっと見つめる。

「今は何も考えないで、素直な思いをぶつけても良いんじゃないかな？」

「「……はい！」」

「うん。真紅なだけに、辛苦な表情してないでさ！」

「「……」」

「あれっ？ ダメ!？」

翔一の言葉に、二人は笑顔で頷く。

が、次に翔一が言ったダジャレに、場が固まる。一瞬、プトティラもビツクリな冷気が通った気がした。

時が流れたのは、店の外から聞こえた悲鳴が聞こえてからだった。アギトランチの分の代金を置き、真紅達はレストランから飛び出す。

日が沈み始め、カップル達が増えてきた時間帯。オットセイの様な立派な牙を持ったヤミーがカップルを襲っている。

『彼女、ホシーーーーー!!』

「何て切ない!」

「非リア充派のヤミーか……」

体を縮め、両腕を振り上げながら叫ぶヤミー。どうやら彼女が欲しいという欲望から生まれた様だ。

そのヤミーを見て、ヴィヴィオが思わずツツコミを入れる。ユースケは真剣な表情でバカな事を呟く。

そんな二人を他所に、真紅は右手を振り上げる。

「キバット!」

『メリークリスマス! まさに祭りだ祭りだ!』

ハイテンションで『キバットバット？世』が真紅の傍に近付き、右手に噛み付く。

『ガブツ！』

すると真紅の頬にステンドガラスの様な模様が出現し、腰には赤いバツクルが撒かれる。

「変身……！！」

真紅がそう囁くと、キバットは『キバツクル』に留まる。途端に真紅の姿が変わり、真っ赤なコウモリの様な戦士、『仮面ライダーキバ』に変身した。

キバは横目で一瞬アインハルトを見た後、勢い良くヤミーに突進する。

「はっ！」

キバが放った鋭い拳が、ヤミーの顎を的確に捉える。

オットセイヤミーは負けじとキバに長い牙を振り下ろす。ダジャレではない。断じて。

キバはその牙を受け止め、キバットがキバのキバツクルから離れる。

『オラオラオラア〜!』

キバットが注意を逸らしている内に、キバは牙を気張って砕く。牙の痕から、血の様に大量のセルメダルが吹き出る。キバは容赦なく赤いフエッスルを投げ、キバットはそれを空中で銜えて吹き鳴らす。

『ウェイク、アープ!』

するとキバは右脚を振り上げ、キバットがその鎖を開放する。キバは左脚をばねの様にして飛び上がり、空中で姿勢を変えて右脚を向ける。

「くあっ!」

『ダークネスムーンブレイク』がヤミーに炸裂し、大地にキバの紋章が現れる。

ヤミーは爆発を起こし、セルメダルの山に変わる。

キバは真紅の姿に戻り、キバットはどこかに飛び去っていった。ユースケとヴィヴィオも物陰に隠れ、こっそりと真紅とアインハルトの様子を伺う。

「あの……アインハルトさ……んむう!？」

しばらく下を向いて考え込んだ後、真紅は意を決して顔を上げる。だがそれも空しく、眼前に迫ってきたアインハルトの唇に塞がれる。今回はすぐにアインハルトが離れるが、互いに顔が真っ赤になる。

「……え？」

「……真紅さん、前に言いましたよね。こっついのは、本当に好きな人とするべきだって……」

「……えっと……それって……？」

「……じ、自分で考えて下さい！」

未だに状況を掴めない真紅と、真紅に背中を向けているアインハルト。

アインハルトは小さな声で真紅に言うと、真紅は顔をさらに赤らめて首を傾げる。一瞬で気付かない真紅に対してかは分からないが、アインハルトもさらに顔を赤らめて語尾を強くする。

真紅はしばらく考えた末、縮こまっているアインハルトの背中を後ろから抱き締めた。

「……あ、ありがとうございます……」

「……お、お返事はないんですか……？　じよ、女性にだけ言わせるといのは……いかなものでしょうか……？」

「あつ……えと……その……僕も、好きです……」

「……誰が？」

「うつ……ア、アインハルトさんが……大好きです」

「っ！……あう……ありがとうございます……」

間が長い二人の会話がようやく終わり、ここに一組のカップルが成立する。

物陰では、ユースケとヴィヴィオが手を叩いて喜ぶ。さらには抱き合うが、互いにはつとなつてすぐに離れる。

真紅とアインハルトは、顔を真つ赤にしながら固まっていた。すると、空から雪がはらりと舞い落ちる。

「「なんとベタな！」」

その光景に、思わずユースケとヴィヴィオがツツコむ。

少し離れたビルの屋上からは、体育座りをして口から粉雪を吐く

『仮面ライダーオーズ・プトティラコンボ』と、『高町なのは』、

『アンク』ヒノ』の姿があつた。

「いいなあ。私もあんな甘酸っぱい恋したかったなあ……」

「はっ！ 相手がこいつの時点で無理だろ」

「だよね〜……」

「あ、あはは〜……」

なのはは四人を見下ろしながら、羨ましそうに呟く。アंकはそれを鼻で笑い飛ばし、オーズを顎で指してなのはを見る。なのはも分かっていたのか、同意してため息をつく。オーズはそんな二人をわき目に、ただひたすら苦笑いを浮かべながら粉雪を吐くのだった……。

オーズの使えるメダル

タカ×1（アंक）

クジャク×1

コンドル×1

ライオン	×	1
シャチ	×	1
サイ	×	1
クワガタ	×	1
プテラ	×	1
トリケラ	×	1
ティラノ	×	1

番外編 メリーX／聖夜と唇と青・春・甘・味（後書き）

前書きでも書きましたが、体調管理には十分お気をつけ下さい。

そして、メリークリスマス！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4438x/>

魔法仮面リリカルオーズViVid

2011年12月25日21時53分発行